

第 4 回文化遺産学フォーラム関連展示

# 企画展 なにわ・大阪の文化力

～大阪文化遺産学の源流と系譜を辿る～

2007 年 11 月 24 日～12 月 1 日

企画展 なにわ・大阪の文化力

本山コレクション金石文拓本

津田秀夫文庫古文書

牧村史陽氏旧蔵写真

パネルディスカッション「回想・津田秀夫と歴史学」

奥田 晴樹「津田秀夫先生 ―その人と学問」

岩城 卓二「回想・津田秀夫と歴史学」

パネルディスカッション

奥田晴樹 岩城卓二 常松隆嗣 藪田貫



Kansai University Research Center for  
Naniwa-Osaka Cultural Heritage Studies  
Occasional Paper No. 7

第4回文化遺産学フォーラム関連展示

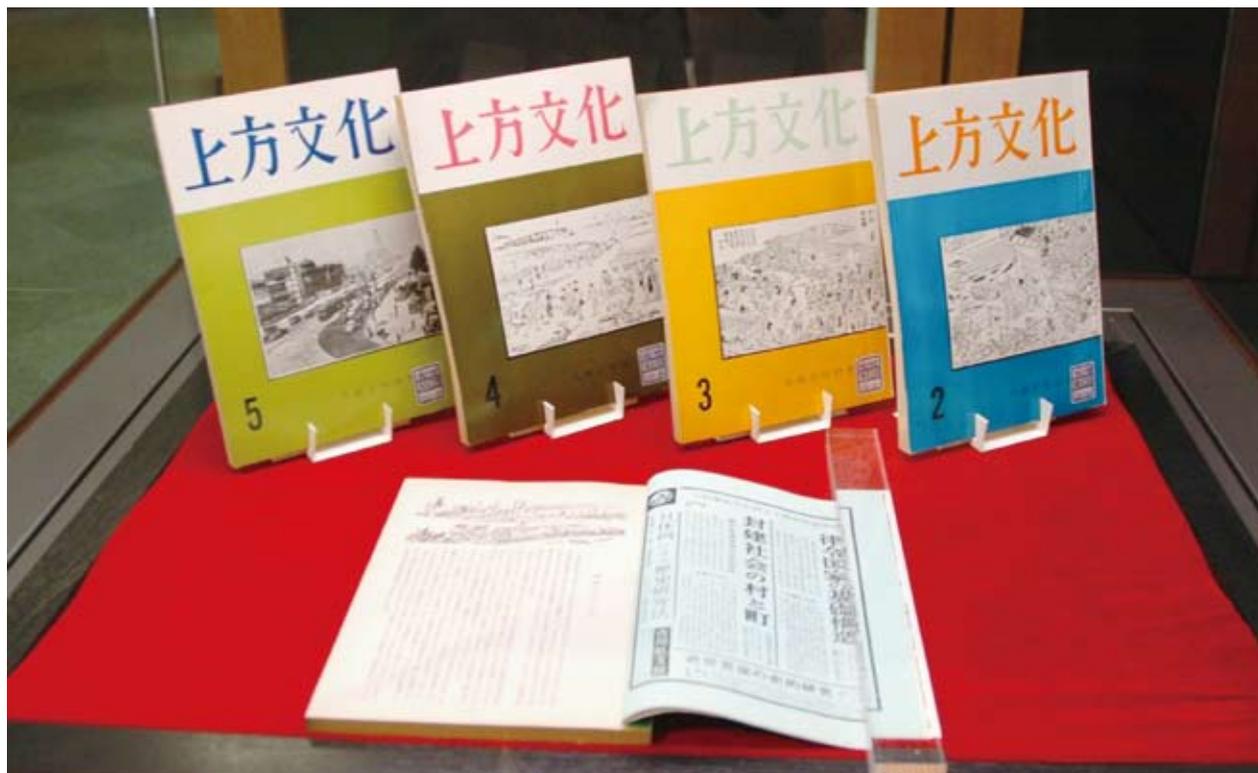
## 企画展 **なにわ・大阪の文化力**

～大阪文化遺産学の源流と系譜を辿る～

2007年11月24日～12月1日



関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター



雑誌『上方文化』



会場の様子



展示解説をする高橋センター長



パネルディスカッションの様子

## ご あ い さ つ

関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センターでは、なにわ・大阪の地に根付いてきた文化遺産の調査・研究をすすめるとともに、その成果を市民のみなさまに公開してまいりました。このたび当センターでは、第4回文化遺産学フォーラムの関連展示として、平成19年11月24日から12月1日まで、関西大学博物館において、企画展「なにわ・大阪の文化力～大阪文化遺産学の源流と系譜を辿る～」を開催いたしました。企画展では、本山コレクションのうち木崎愛吉氏旧蔵の金石文拓本資料、津田秀夫先生収集の古文書、『大阪ことば事典』など大阪に関する著作の多い牧村史陽氏旧蔵写真などを出品いたしました。また、期間中のパネルディスカッション「回想・津田秀夫と歴史学」では、津田先生ゆかりの方がたと若い研究者が会し、先生の学問やお人柄を偲ぶ会を催しました。

このたび、企画展とパネルディスカッションを「NOCHS Occasional Paper No.7」として刊行するに当たり、本書を通じて「文化遺産学」の源流と系譜を辿るとともに、なにわ・大阪の文化力と、彼の地を愛してやまなかった三人の歴史家・郷土史家の熱い思いを感じ取っていただければ幸いです。

2008年11月

関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター  
センター長 高橋隆博

#### 例言

- 本書は、平成 19 年 11 月 24 日から 12 月 1 日に関西大学博物館において開催された、第 4 回文化遺産学フォーラム関連展示「企画展 なにわ・大阪の文化力～大阪文化遺産学の源流と系譜を辿る～」にもとづいて編集したものである。
- パネルディスカッション「回想・津田秀夫と歴史学」は、平成 19 年 11 月 29 日に関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センターにおいて開催され、本書に収載するにあたって、若干の編集を加えた。
- 企画展および本書の解説については、当センター研究員内田吉哉・櫻木潤・松永友和が担当し、編集は松永友和が行った。

第4回文化遺産学フォーラム関連展示

## 企画展 なにわ・大阪の文化力

～大阪文化遺産学の源流と系譜を辿る～

### 目次

#### ごあいさつ

#### 企画展 なにわ・大阪の文化力 ～大阪文化遺産学の源流と系譜を辿る～

本山コレクション金石文拓本 8

津田秀夫文庫古文書 18

牧村史陽氏旧蔵写真 30

#### パネルディスカッション「回想・津田秀夫と歴史学」

奥田 晴樹 氏  
津田秀夫先生－その人と学問 48

岩城 卓二 氏  
回想・津田秀夫と歴史学 58

パネルディスカッション  
奥田 晴樹 氏 岩城 卓二 氏 常松 隆嗣 氏 藪田 貴 64

#### 編集後記

\*表紙の写真は、関西大学簡文館（平成19年3月に「登録有形文化財」指定）

# 本山コレクション金石文拓本

本山コレクションは、大阪毎日新聞社 5 代目社長本山彦一氏が収集した、日本でも有数のコレクションである。関西大学には、博物館に考古資料や歴史資料が、総合図書館に本山氏の蔵書が収められている。

本山コレクションには、2300 点に及ぶ金石文拓本がある。金石文とは、墓碑や石碑などの石造物、刀剣や梵鐘などの金属製品に刻まれた文字資料である。本山コレクションの金石文拓本の大部分は、『大日本金石史』を著した木崎愛吉（好尚）氏が、明治末年から大正時代にかけて収集したものである。

今回の展示では、木崎氏旧蔵の金石文拓本のうち、古代から近世の大阪にゆかりのある人物やことさらに焦点をあてた。「なにわ・大阪の文化力」を、金石文拓本を通して感じ取っていただければ幸いである。

## 1. 本山コレクションと木崎愛吉旧蔵拓本

本山彦一（1853～1932）は、熊本藩の出身。藩校時習館で学んだのち、上京して福澤諭吉に師事した。大阪新報社、大阪藤田組支配人を経て、明治 36 年（1903）に大阪毎日新聞社社長に就任。それまで政論が中心であった新聞を大衆の読み物とし、販売網を拡大した。学術面での貢献も大きく、自然科学や考古学などで多くの足跡を残している。

昭和 5 年（1930）に、東京人類学会会長神田孝平のコレクションを譲り受けたのを機に、収集品の整理に着手した。その際に、本山から指名されたのが、末永雅雄（1897～1991）である。本山は、堺市浜寺の自宅隣接地に富民協会農業博物館を建設。その一室を「本山考古室」と名づけ、彼の収集品を陳列・公開したが、末永は、本山考古室に通い、その整理と調査にあたった。国の重要文化財に指定されている河内国府遺跡出土の玦状耳飾などの考古資料は、末永がまとめた『富民協会農業博物館本山考古資料室目録』や『富民協会農業博物館本山考古資料室図録』に収められ、広く知られているが、木崎愛吉旧蔵の金石文拓本の存在はあまり知られていない。

### 木崎愛吉の金石文研究

木崎愛吉（1865～1944）は、大坂南組農人橋材木町（大阪市中央区材木町）の出身で、小学校教諭や大阪朝日新聞社の記者として活躍する。幼い頃から大坂の町人学者の墓所を訪ね歩き、明治 23 年（1890）には磯野秋渚と「浪華墓跡考」を著したほか、大阪市内にある墓碑を踏査するために「浪華撫古会」を結成した。こうした活動で得た成果は、大正 3 年（1914）に『撰河泉金石文』、大正 10 年から翌 11 年にかけて『大日本金石史』・『大坂金石史』として大成された。本山コレクションの木崎旧蔵金石文拓本は、これらの著作のもととなったものである。木崎が収集した金石文拓本には、現在風化や剥落の被害を受けている金石文のものが多く、貴重な歴史資料であるといえる。

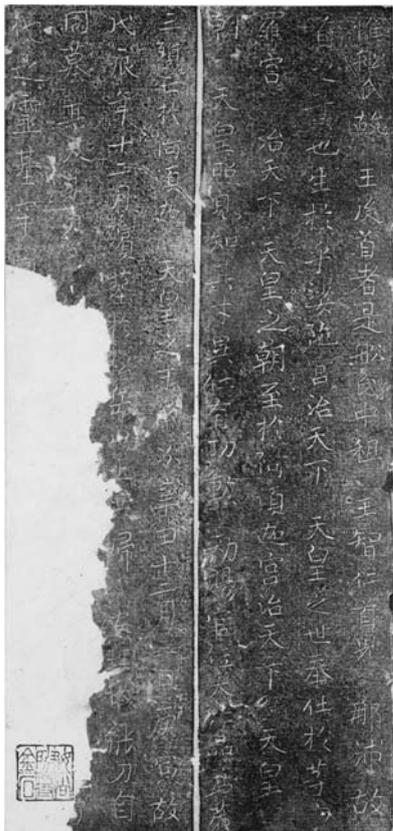
### 本山コレクションと木崎愛吉旧蔵拓本

木崎愛吉旧蔵の金石文拓本が本山コレクションに加わった背景には、『大日本金石文』とそれに続く『大坂金石史』の出版が関わっているとみられる。当時、木崎は、相当な資金難であった。蔵書を売却して出版資金を捻出しようとするが、それでもならず、自らが収集した金石文拓本を手放す決意をする。そこへ、一括して譲り受けたいとする「篤志の人士」を紹介され、木崎がいつでも借覧できるという好条件で、その人物に売却した。この「篤志の人士」が本山彦一であったとみられる。本山による一括購入のおかげで、木崎旧蔵の金石文拓本が今に伝わっているのである。

## 2. 古代・中世の金石文拓本

古代の大坂には、中国や朝鮮半島からの渡来系の人びとが多く暮らし、彼の地の優れた先進技術や文化を伝え、わが国に根づかせていった。彼らの多くは都で活躍し、死後は、出身地である大阪近郊に葬られた。高槻市や南河内一帯からは、彼らの墓地に収められた墓誌が出土している。

中世の大坂では、「河内鑄物師」の活躍が有名である。彼らは、河内国丹南郡（堺市美原区周辺）を中心に、寺院の梵鐘（釣鐘）などの大型製品から日常品まで、さまざまな金属製品の製作に関わっていた。「河内鑄物師」の伝統技術は、今なお大阪に生き続けている。



1

### 1 船王後墓誌銘拓本

縦 29.0 cm 横 13.9 cm

船王後の墓誌は、江戸時代に大阪府柏原市大字国分の松岡山（松岳山）から出土したと伝えられ、昭和36年（1961）に国宝に指定される。銘文には、百濟系の渡来人である船王後の出自・経歴・没年・埋葬の経緯が記されている。製作年代は、7世紀末から8世紀初めとされる。

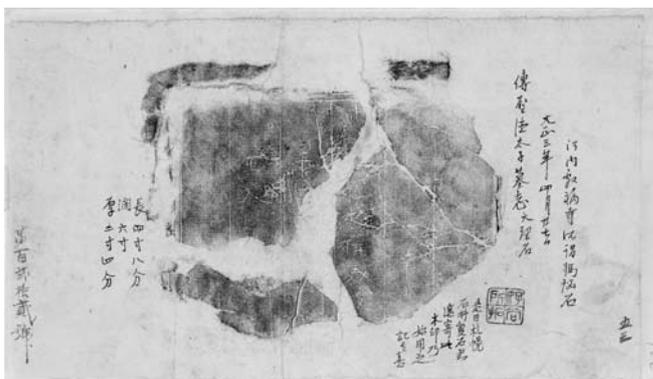
拓本の後ろ二行は破損しており、判読できない。

### 2 伝聖徳太子墓誌銘拓本

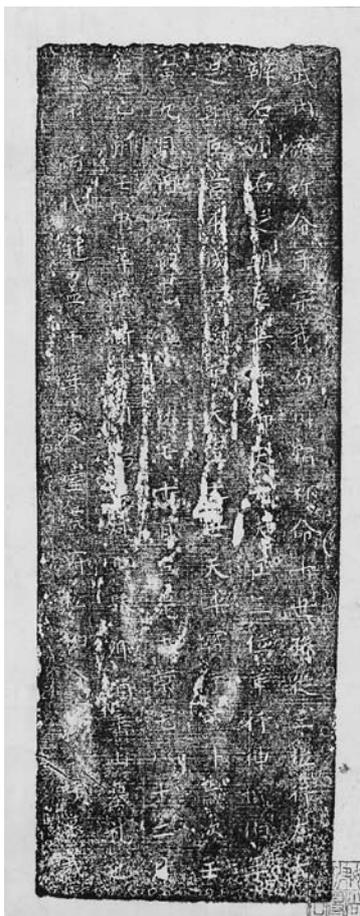
縦 14.4 cm 横 18.6 cm

伝聖徳太子墓誌は、『古事談』などによると、河内国石川郡磯長（大阪府南河内郡太子町）の聖徳太子墓から、天喜年間（1053～1058）に発見されたとある。現在は、太子町の叡福寺所蔵である。

木崎旧蔵の拓本には「好尚所拓」などの落款が捺されているが、その印が札幌の石井雙石の作で、この拓本に初めて捺されたことがわかる。



2



3

### 3 石川年足墓誌銘拓本

縦 29.0 cm 横 10.2 cm

石川年足の墓誌は、文政3年（1820）に摂津国嶋上郡真上光徳寺の荒神山（大阪府高槻市月見町）で発見され、現在国宝に指定されている。

年足は、出雲守・中納言などを歴任し、天平宝字2年（758）に藤原仲麻呂が官号を唐風に改める際に関わるなど、仲麻呂の側近として活躍した。



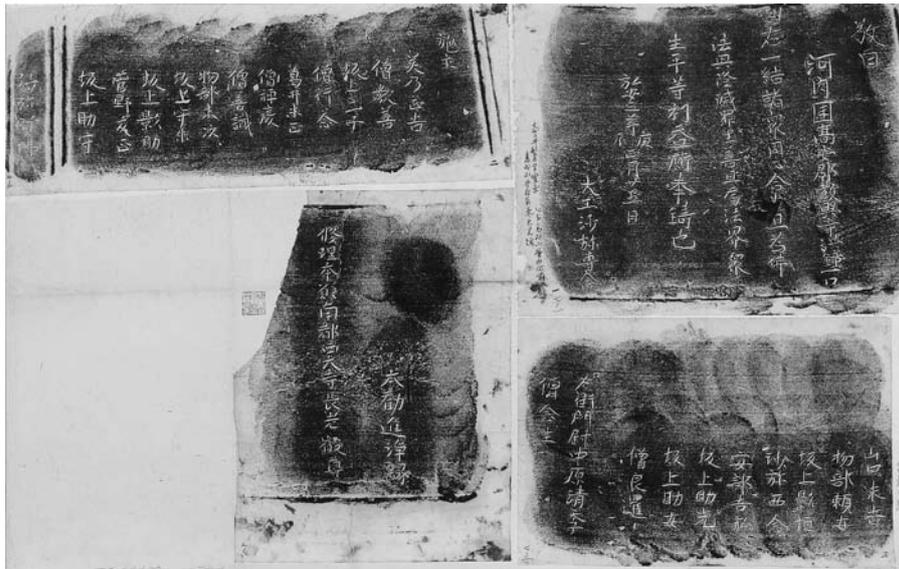
4

### 4 高屋枚人墓誌銘拓本

縦 25.4cm 横 17.5cm

高屋枚人の墓誌は、大阪府南河内郡太子町の丘陵斜面より、延享元年（1744）に発見されたと伝えられる。現在は、太子町の叡福寺に所蔵され、重要文化財に指定されている。

高屋枚人は、河内国古市郡高屋（羽曳野市古市付近）を本貫地とし、銘文からは常陸国大目<sup>だいしかん</sup>であったことがわかる。



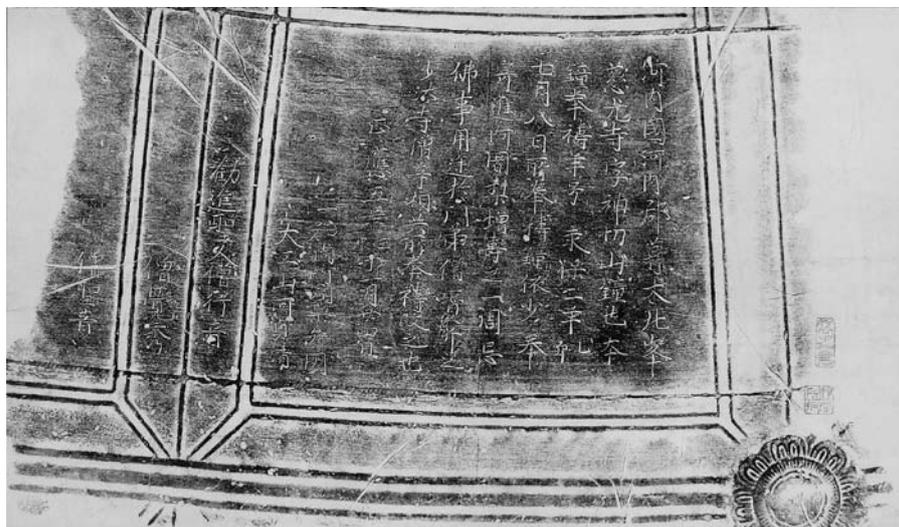
5

**5 金剛峯寺鐘銘拓本**

第一紙 縦 26.8cm 横 34.0cm 第二紙 縦 15.2cm 横 42.9cm

第三紙 縦 21.2cm 横 31.8cm 第四紙 縦 31.8cm 横 42.8cm

もと河内国高安郡（八尾市）教興寺の梵鐘。銘文からは、弘安3年（1280）正月25日、南都西大寺叡尊の発願と僧浄縁の勧進で、23人の一結衆が鑄造したものとわかる。「大工専念」は河内鑄物師の一人。現在、梵鐘は高野山霊宝館で展示されている。



6

**6 慈光寺鐘銘拓本**

縦 34.7cm 横 59.8cm

慈光寺は、東大阪市東豊浦町にある。1300年前に役行者によって開基されたと伝えられ、修験道の道場として栄えた。梵鐘は、東大阪市内最古のものとされる。

銘文には、永保2年（1082）に鑄造した鐘が小さいために、正応5年（1292）に増寿阿闍梨の一周忌に際し、弟子実弁らが寄進したとある。

### 3. 近世の金石文拓本

近世を代表する「なにわ・大阪の文化力」は、芸能と文芸であろう。

道頓堀には八軒の芝居小屋がたちならび、浄瑠璃や歌舞伎が上演され、多くの人びとを魅了した。人形浄瑠璃では、17世紀後半に竹本義太夫が出て、道頓堀に竹本座を旗揚げし、歌舞伎の世界では、坂田藤十郎・片岡仁左衛門（初代・七代）・中村歌右衛門（初代・三代）らが一世を風靡した。

文芸では、井原西鶴・近松門左衛門らを輩出した。西鶴は『好色一代男』などを著し、近代小説の先駆けとなる浮世草子を生みだし、近松は『世継曾我』・『曾根崎心中』などの脚本を手がけ、「日本のシェイクスピア」とも呼ばれている。



(正面)



(背面)



(台石)

#### 7 近松門左衛門夫妻墓碑拓本

正面 縦 49.3cm 横 21.3cm

背面 縦 42.5cm 横 21.8cm

台石 縦 35.5cm 横 49.1cm

近松門左衛門は、承応2年（1653）に越前藩士の次男に生まれる。早くから傑出した文才をもち、天和3年（1683）に『世継曾我』を発表。竹本義太夫にこれを提供した。『冥土の飛脚』・『曾根崎心中』など多くの脚本を世に送り出した。

墓は、広濟寺（尼崎市）と法妙寺跡（大阪市中央区）にあるが、本拓本は、木崎の書き込みから法妙寺のものであることがわかる。

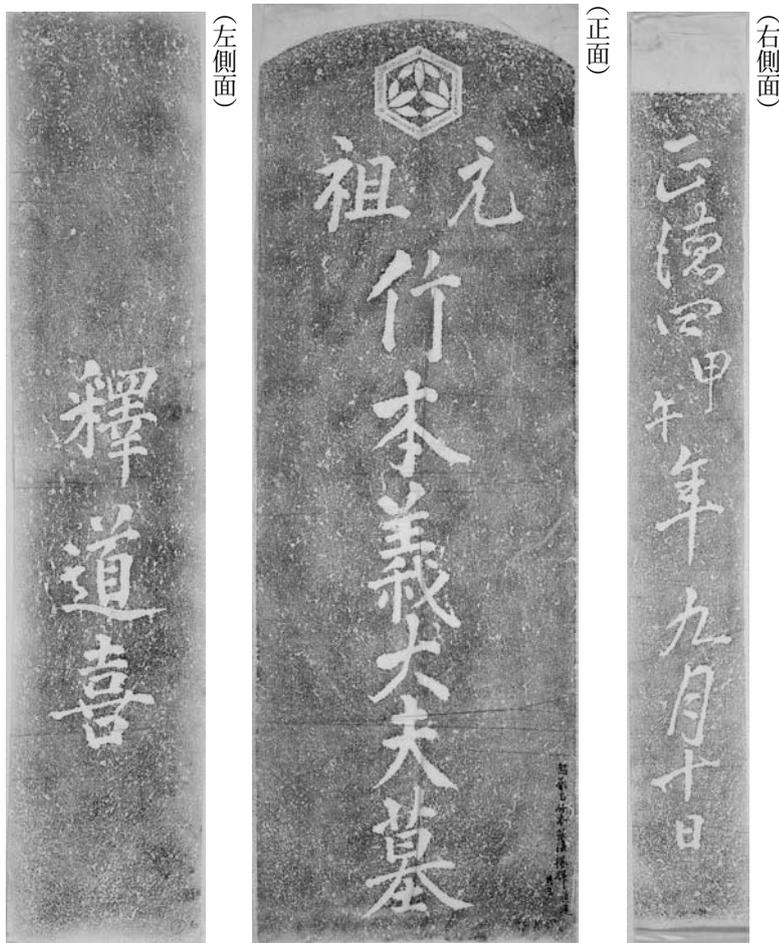
### 8 坂田藤十郎墓碑銘拓本

縦 25.0cm 横 52.5cm

坂田藤十郎は、大坂荒木座で『夕霧名残の正月』の伊左衛門役を演じて名声を高める。元禄6年（1693）頃からは近松門左衛門の作を多く演じるようになり、上方歌舞伎の和事をつくりあげた。大阪市天王寺区の四天王寺の北墓地、元三大師堂西にある墓は、大正8年（1919）に有志によって建てられた。



8



9

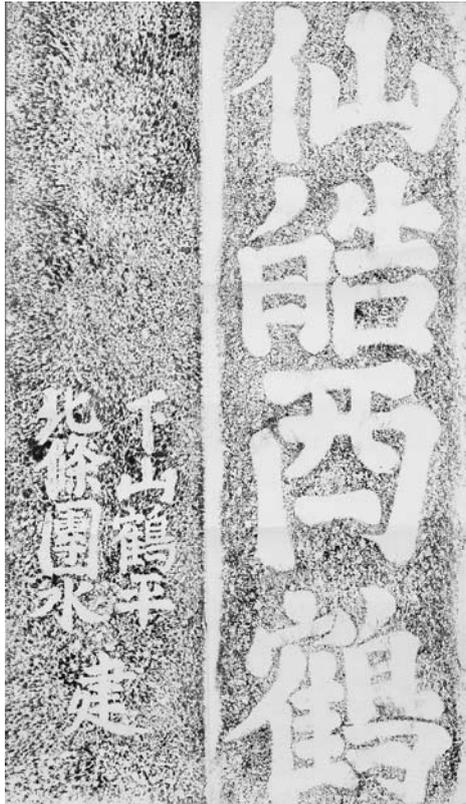
### 9 初代竹本義大夫墓碑拓本

（正面） 縦 96.5cm 横 32.5cm

（左側面） 縦 95.5cm 横 12.0cm

（右側面） 縦 34.6cm 横 17.5cm

初代竹本義太夫は、天王寺村の生まれ。道頓堀に竹本座を創設するなど人形浄瑠璃発展の主導的役割を果たした。豪快な語り口から艶やかな語り口まで、その芸域は広い。墓は、超願寺（大阪市天王寺区）にあるが、墓石の傷みが激しく、この拓本によって銘文の全容がわかる。

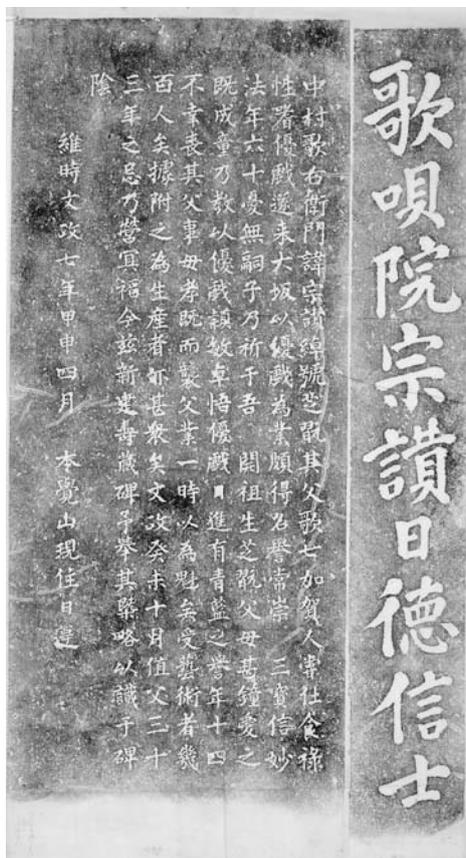


10

**10 井原西鶴墓拓本**

縦 68.5cm 横 39.4cm

井原西鶴は、大坂の富裕な商家に生まれる。幼い頃から俳諧を始め、のちに西山宗因に師事し、談林派の代表的俳人として知られる。『好色一代男』発表後は、浮世草子作者としても活躍し、多くの作品を残した。墓は、誓願寺（大阪市中央区）にあり、大阪市指定文化財および大阪市史跡顕彰碑に指定されている。



11

**11 中村歌右衛門（三世）墓碑銘拓本**

縦 94.5cm 横 47.7cm

三世中村歌右衛門は、初世中村歌右衛門の実子。屋号は加賀屋。寛政3年（1791）に歌右衛門を襲名。一時、中村芝翫を名乗る。小柄でしゃがれた声だったが、工夫に富んだ芸で人気を博した。

墓は、日蓮宗正法寺（大阪市中央区）にある。墓石の傷みが進み、判読困難な文字もあり、拓本によって銘文の内容がわかる。

史料7 近松門左衛門夫妻墓碑拓本

(正面) 阿耨院穆矣日一具足居士

(背面) 一珠院妙中日事信女

(背面) 享保九甲辰年十一月一日

(台石) 施主

近松氏

正七

【落款】

「好尚所藏金石」〔朱文方印〕

【添書】

「法妙寺近松巢林子碑 其三」

史料8 坂田藤十郎墓碑銘拓本

寶永六年十一月一日歿

坂田藤十郎

重譽一室信士

史料9 初代竹本義太夫墓碑拓本

(正面) (義太夫の家紋) 元祖竹本義太夫墓

(右側面) 正徳四甲午年九月十日

(左側面) 釋道喜

【落款】

「好尚所藏金石」〔朱文方印〕

【添書】

「超願寺竹本筑後掾碑 追建／廿三」

史料10 井原西鶴墓拓本

(正面) 仙皓西鶴

(左側面) 下山鶴平 建

(左側面) 北條團水

史料11 中村歌右衛門(三世)墓碑銘拓本

(正面) 歌唄院宗讚日徳信士

(背面) 中村歌右衛門諱宗讚綽號芝翫其父歌七加賀人嘗仕食祿

性嗜優戲遂來大坂以優戲為業頗得名譽常崇 三寶信妙

法年六十憂無嗣子乃祈于吾 開祖生芝之翫父母甚鐘愛之

既成童乃教以優戲穎敏卓悟優戲<sup>日九</sup>進有青藍之譽年十四

不幸喪其父事母孝既而襲父業一時以為魁矣受藝術者幾

百人矣據附之為生産者亦甚衆矣文政癸未十月值父三十

三年之忌乃營冥福今茲新建壽藏碑予舉其槩略以識于碑

陰

維時文政七年甲申四月 本覺山現住日遵

【裏書】

「大阪市東区高津中吉町正法寺 初代中村歌右工門碑」

弘安三年庚辰正月廿五日

大工沙弥専念

施主

美乃正吉

僧教善

坂上三子

僧行念

葛井末正

僧禅慶

僧善識

物部末次

坂上守末

坂上影助

菅野友正

坂上助守

沙弥賀佛

山口末吉

物部頼安

坂上影恒

沙弥西念

安部吉弘

坂上助光

坂上助安

僧良暹

左衛門尉中原清季

僧念生

大勸進浄縁

修理本願南都西大寺長老叡尊

【落款】

「好尚所藏金石」〔朱文方印〕

【添書】

「大正三年秋季皇靈祭 今在高野山案内所前」

「高野山井村真琴君見贈」

史料6 慈光寺鐘銘拓本

河内國河内郡葛木北峯

慈光寺字神切山鐘也本

鐘奉禱年号 承保二年乙卯

七月八日所奉禱鐘依少奉

寄進阿闍梨增壽之一周忌

佛事用途於門弟僧實弁之

沙汰寺僧等相共所奉禱改之也

正應五年壬辰十一月廿四日

一和尚阿闍梨弁円

大工山河貞清

勸進聖人僧行音

僧覚秀

僧聖音

【落款】

「好尚手拓金石」「好尚所拓」〔朱文方印〕

## 4. 拓本翻刻

### 史料1 船王後墓誌銘拓本

惟船氏故 王後首者是船氏中祖 王智仁首見 那沛故首之子也生於乎娑隨宮治天下 天皇之世奉仕於等由羅宮 治天下 天皇之朝至於阿須迦宮治天下 天皇之朝 天皇照見知其寸異仕有功勳 勅賜官位大仁品為第三殞亡於阿須迦 天皇之末歲次辛丑十二月三日庚寅故戊辰年十二月殯墓於松岳山上供婦 安理故能刀自同墓其大兄刀

〔永却之實地也〕  
〔羅古首之墓並作墓也即為安保万〕

代之靈基牢固

#### 【落款】

「好尚所藏金石」〔朱文方印〕

### 史料2 伝聖德太子墓誌銘拓本

〔今年歲次〕  
□□□□辛巳  
〔地尤〕  
□□足稱美□  
〔四百三十餘〕  
于□□□□□  
王大臣□□□□  
〔発起寺〕

#### 【落款】

「好尚所拓」〔朱文方印〕

#### 【添書】

「河内叡福寺所謂瑪惱石／大正三年四月廿七日／傳聖德太子墓志 大理石」  
「是日札幌／石井雙石君／遥寄此／木印乃／始用之／記是喜」  
「長 四寸八分／潤 六寸／厚 二寸四分」

### 史料3 石川年足墓誌銘拓本

武内宿祢命子宗我石川宿祢命十世孫從三位行左大辨石川石足朝臣長子御史大夫正三位兼行神祇伯年足朝臣當平成宮□〔御〕宇天皇之世天平寶字六年歲次壬寅九月丙子朔乙巳春秋七十有五薨于京宅以十二月乙巳朔壬申葬于攝津國□□郡白髮鄉酒垂山墓礼也儀形百代冠蓋千年夜臺荒寂松柏含□□〔禮焉〕呼哀哉

#### 【落款】

「好尚所藏金石」〔朱文方印〕

### 史料4 高屋枚人墓誌銘拓本

故正六位下常陸国大目高屋連枚人之墓寶龜七年歲次丙辰十一月乙卯朔廿八日壬午葬

#### 【落款】

「好尚所拓」「好尚所藏金石」〔朱文方印〕

### 史料5 金剛峯寺鐘銘拓本

敬白  
河内国高安郡教興寺洪鐘一口  
右一結諸衆同心合力且為佛法興隆滅罪生善且為法界衆生平等利益所奉鑄也

# 津田秀夫文庫古文書

「津田秀夫文庫古文書」は、元関西大学教授の津田秀夫先生が長年にわたって収集した、古文書のコレクションである。津田先生は、1978年3月の東京教育大学の廃学にともない、同年4月に関西大学に移り、文学部史学・地理学科で教鞭をとられた。そして、1989年3月をもって定年退職され、1992年11月15日にご逝去された。津田先生の死後、先生の文庫はご遺族のご厚意のもと、一旦、大阪市史編纂所に寄贈された。そこで蔵書と古文書に分けられたのち、古文書が1996年1月に関西大学文学部古文書室に寄贈され、「津田秀夫文庫古文書」と名付けられた。古文書の内容は、摂津・河内・和泉などの畿内・近国地域はもちろん、関東や長崎など、多岐にわたっている。

今回は、「津田秀夫文庫古文書」のうち、整理と目録作成が終了した古文書を中心に展示をする。

## 1. 歴史学者・津田秀夫の生涯

津田秀夫（1918～1992）は、日本近世史研究の第一人者であり、戦後いち早く社会経済史研究に取り組み、地域の史料に基づいて実証的な研究を行った歴史学者である。その生涯は、研究と教育に一生を捧げた毎日であった。

津田は、1918年6月、大阪府西成郡今宮町にて誕生した。1942年に東京文理科大学を卒業後、農林学校の教諭となるが、戦争のため休職。復員の後、大阪第一師範学校、1952年に東京教育大学に勤める。1978年3月、東京教育大学廃学に伴い辞職。同年4月に関西大学に移る。1989年3月をもって、関西大学を定年退職。1992年9月まで関西大学大学院の講師を務め、同年11月、膵臓癌のため逝去。74歳であった。

### 津田秀夫の史料調査

戦後、津田は各地を歩いて精力的に史料調査を行った。佐々木潤之介の「弔辞」に、次の一節がある。

津田さんは大阪時代から一貫して大阪とその周辺を精力的に歩いて史料を博搜し、それによってほかの者が近づけないような厳格な研究を積み重ねていました。和泉・河内の地域で津田さんの足跡のないところはないといわれました。私も何度か大阪周辺を廻ったことがあります。その度ごとに津田さんのお名前を耳にしました。それは、史料調査の対象である地域の人びとに好意をもたれ、信頼されていることの証しでありました。

（『津田秀夫先生を偲ぶ』より）

### 津田秀夫の授業

津田の授業は、自身の研究の現段階を率直に披瀝するという、非常に難解な授業であった。次の逸話がある。

ある研究論文が発表されると、それを授業で事細かに説明し、次に「こういう内容の論文が出るだろう」という先触れまで述べていたという。授業の難解さ故についていけない学生が続出。それでも津田はお構いなし。ときに受講者の半分以上が不可になることもあったという。

津田の教育は、まず自分が最先端の研究者であり続けるための努力を行い、その知でもって学生に全力で立ち向かうことであった。津田にとって、授業も、学会報告も、真剣勝負の場であったのである。

### 津田秀夫の教育と学問研究

津田は、教育についても研究と同様、情熱を注いだ。次の一節に津田の教育に対する思いが込められている。

今日における国民の教育というのは、国家が国民教育に取り組むまえに、その原型は民衆教育運動のなかに存在し、むしろ、民衆教育に社会的な公的な配慮をめぐらしたのは、権力よりは民衆自体の教育運動であったことを明らかにしたいのである。教育研究の自由が保証されなければ、批判精神ははぐくまれず、また、教育研究に創意と工夫とはうまれるものではない。批判精神は学問研究の創造に不可欠である。

(『近世民衆教育運動の展開』『はしがき』より)

### 津田秀夫の歴史学

津田は、「歴史学は社会科学でなければならぬ」と絶えず強調し、かつ苦闘した。次の一節は、それを端的に示している。

科学としての歴史学がとりあげる法則性というのは、人間の主観を超えて、恣意的な解釈による歴史学を排して、過去での人間の存在の客観的な在り方から、未来への展望を歴史を通じて組み立て、現実を転換させる方向を見通そうとするものである。その点で歴史学は人間存在に深くかかわっている学問である。

(『史料保存と歴史学』より)

### 津田秀夫の学会活動

津田は、大阪歴史学会・日本史研究会・地方史研究協議会・歴史学研究会・歴史科学協議会・歴史教育者協議会などの学会の熱心な会員として、さまざまな活動を行った。

なかでも大阪歴史学会は、津田が岡本良一や井上薫、有坂隆道らとともに創設した学会であり、今日に至るまで、半世紀以上にわたって会の活動は続いている。戦後、1948年1月に発足した大阪歴史談話会が母体となって、翌年10月に大阪歴史学会は結成。1951年6月の総会で、機関誌『ヒストリア』の刊行が決議されるが、その名称は津田の発案であったという。

### 「津田秀夫文庫古文書」の活用

津田が残した古文書は、近年、整理・目録化が進められている。2003年に『関西大学博物館紀要』から出された「津田秀夫文庫古文書目録(1)」を皮切りに、現在「古文書目録(7)」までの整理・目録化が済んでいる。「津田秀夫文庫古文書」のうちのいくつかは、すでに学術史料集(大阪の部落史委員会編『大阪の部落史 第一巻』、部落解放・人権研究所、2005年)や学外での展示(貝塚市郷土資料展示室主催、特別展「米穀肥料商廣海家と泉南地域」会期：平成19年9月1日～10月21日)において活用されている。今後、さらに整理・目録化が進めば、より一層学術研究に貢献することになるであろう。

### 現在(2008年10月)までに、整理・目録化が済んだ津田秀夫文庫古文書

- 藪田貫 「津田秀夫文庫古文書(1) 平野郷含翠堂・土橋家文書」(『関西大学博物館紀要』第9号、2003年)  
 石本倫子・藪田貫 「津田秀夫文庫古文書(2) 摂津国住吉郡桑津村文書・絵図」(『関西大学博物館紀要』第10号、2004年)  
 松本望・藪田貫 「津田秀夫文庫古文書(3) 津田秀夫文庫蔵書」(『関西大学博物館紀要』第11号、2005年)  
 藤尾隆志・藪田貫 「津田秀夫文庫古文書(4) 松代藩真田家大坂御用場関係文書」(『関西大学博物館紀要』第12号、2006年)  
 吉川潤 「津田秀夫文庫古文書(5) 長崎関係文書」(『関西大学東西学術研究所紀要』第40号、2007年)  
 荒武賢一朗 「津田秀夫文庫古文書(6) 播磨国赤穂郡若狭野・浅野隼人家関係文書」(『関西大学博物館紀要』第13号、2007年)  
 中井陽一 「津田秀夫文庫古文書(7) 河内国丹北郡松原村・別所村文書」(『関西大学博物館紀要』第14号、2008年)

## 2. 津田秀夫と平野含翠堂研究

津田秀夫の平野含翠堂<sup>がんすいどう</sup>研究は、津田の大阪在勤時代の1940年代後半にさかのぼる。著書『近世民衆教育運動の展開—含翠堂にみる郷学思想の本質—』（御茶の水書房、1978年）には、大阪学芸大学（のちの大阪教育大学）の酒井忠雄と平野郷町の研究を始め、のちに藤直幹・有坂隆道・高尾一彦らと研究会を行ったことが記されている。

津田は、長年にわたって手弁当で史料調査を続けたことで知られるが、平野の調査・研究は、戦後ほどなくして津田らが手掛けたのである。

### 平野郷含翠堂・土橋家文書（古文書目録(1)）

津田の含翠堂研究のもととなった古文書、95点。三輪執斎の講義記録や享保飢饉時の賑窮（給）事業、土橋七郎兵衛を差出・宛名とする書簡など、いずれも含翠堂に直接関わる重要文書群。



1

### 1 含翠堂三輪先生（執斎）講説記録

享保9年(1724)4月に土橋友直の新宅で行われた三輪執斎(1669～1744)の講説記録。三輪執斎は、名を希賢、通称を善蔵、号を執斎、別号を躬耕廬といった。最初、朱子学者佐藤直方の門人となるが、のちに陽明学に傾倒。その後、京都に移り、京坂に学を講じた。含翠堂の創設者土橋友直とは親交があり、後に土橋は三輪を師事した。三輪は含翠堂において講義を行うなど、含翠堂にとって多大な影響を与えた人物である。

### 平野含翠堂

享保2年(1717)に摂津平野郷町に設立された郷学。明治5年(1872)に学制が公布されるまでの150年間、平野郷町の公的教育機関として存続した。含翠堂は土橋友直の発議により、土橋宗信ら他4名が同志として平野郷市町に設立。初期の賛助者には、懐徳堂の創設者の一人富永芳春をはじめ、末吉や辻葩など、郷内の有力者がいた。学風は朱子学・陽明学・古学など、必ずしも一派に固定しなかった。講師には、三輪執斎や伊藤東涯、幕末期には藤沢東咳らが来講。享保9年設立の懐徳堂をはじめ、各地の郷学に影響を与えた。



含翠堂跡の碑

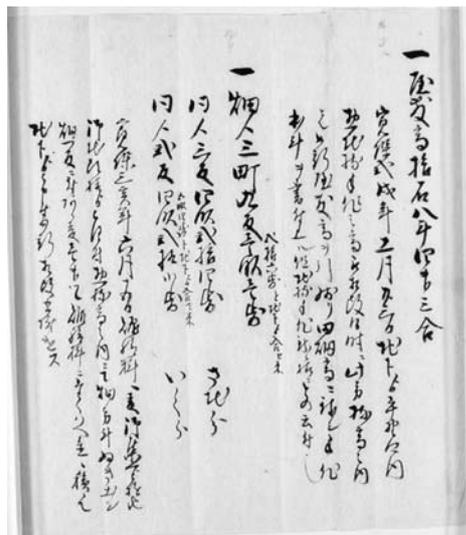
昭和60年(1985)、含翠堂顕彰会によって建てられた



2 (冒頭部分)



2 (末尾部分)



3

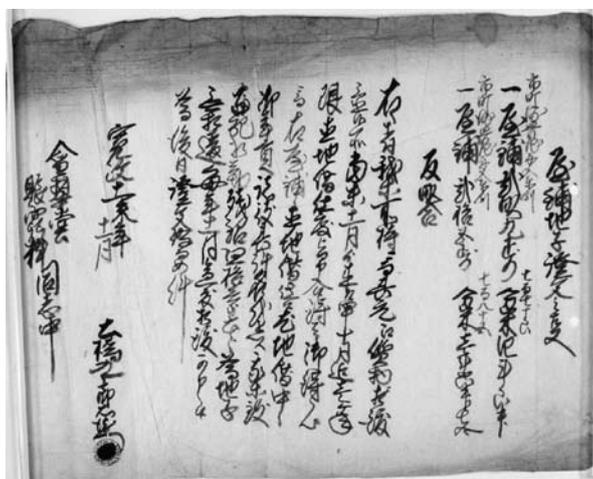
## 2 含翠堂修復銀の拝借願

文政8年(1825)2月18日付、含翠堂同志中惣代の土橋七郎兵衛から「地方御役所」宛の願書。この場合、「地方御役所」は大坂町奉行所を指す。内容は、含翠堂修復のために過料銀のなかから3貫目の貸与を町奉行所に願い出たもの。また大坂城代が巡見の折に立ち入っていたことなどもわかる。なお、含翠堂の建物は、文政13年(1830)に大規模な普請が行われている。

## 3・4 含翠堂の賑窮(給)事業

含翠堂の特徴の一つとして、創立期から賑窮事業が教育活動の一環として含まれていた点あげられる。史料3は、含翠堂が享保17年(1732)の享保飢饉を機に始めた、賑窮料積み立て事業のその後の状況を示している。

史料4は、土橋九郎右衛門から含翠堂賑給料同志中宛の質地・質物証文。含翠堂における賑窮事業は、幕末にいたるまで数次にわたって、郷町と協力しながら行われた。



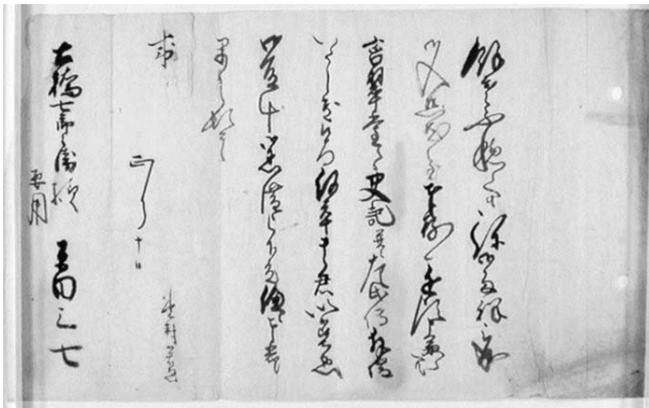
4

### 5・6 平野含翠堂関係書簡

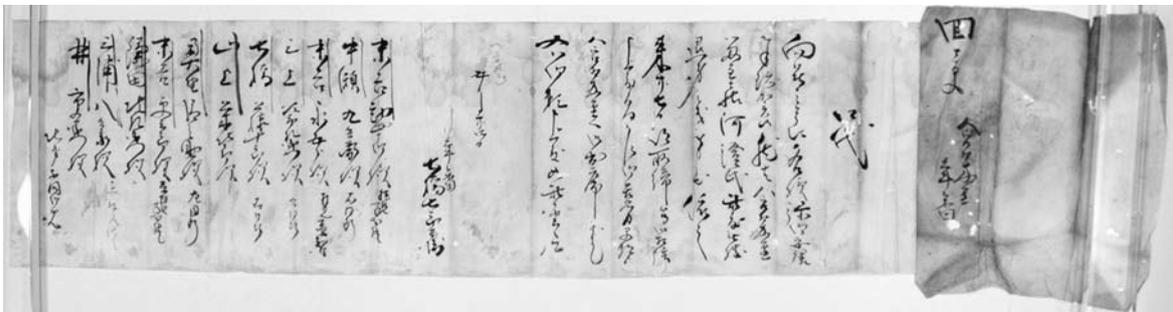
史料5は、原田三七から土橋七郎兵衛あての書簡。内容は、含翠堂所蔵の『史記』と『左氏伝』の借用を依頼したもの。

史料6は、土橋七郎兵衛から末吉勘四郎ほか10名あての書簡。内容は、含翠堂留主居（含翠堂に住込み、事務管理業務を携わる）河澄氏の退身後の取締について、末吉勘四郎らの出席を呼びかけたもの。

なお、両史料は『近世民衆教育運動の展開』（177頁・199頁）で使用されている。



5



6



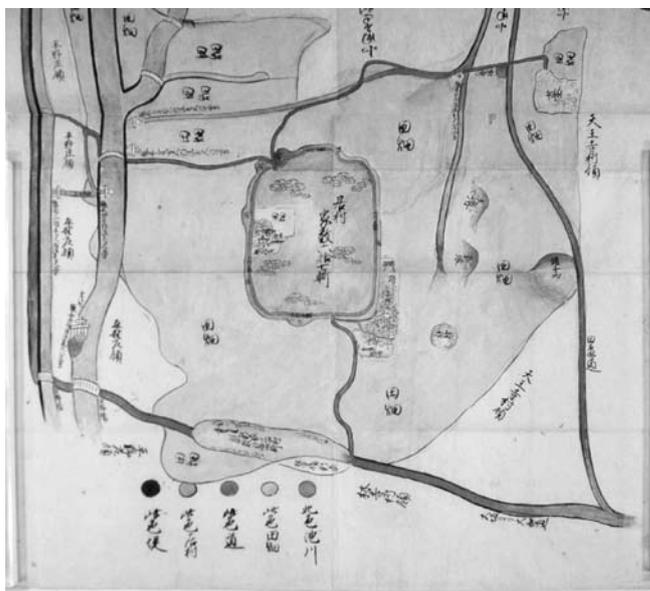
津田秀夫文庫古文書の展示風景

### 3. 「津田秀夫文庫古文書」の紹介

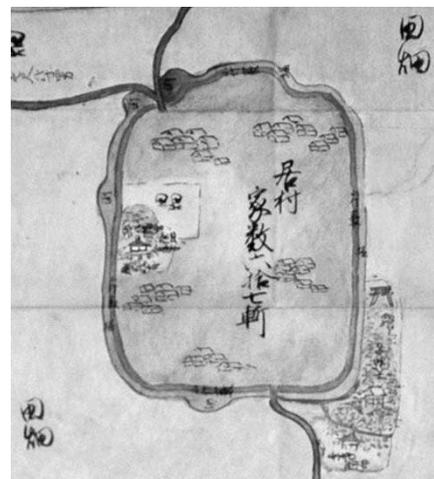
津田は大阪地域以外にも、各地の古文書を収集した。日本列島規模の江戸時代を明らかにしたいという津田の熱い思いが、これら収集文書に込められている。ここでは、整理・目録化が済んだ史料のなかから、いくつかを選んで紹介をする。

#### 摂津国住吉郡桑津村文書・絵図（古文書目録（2））

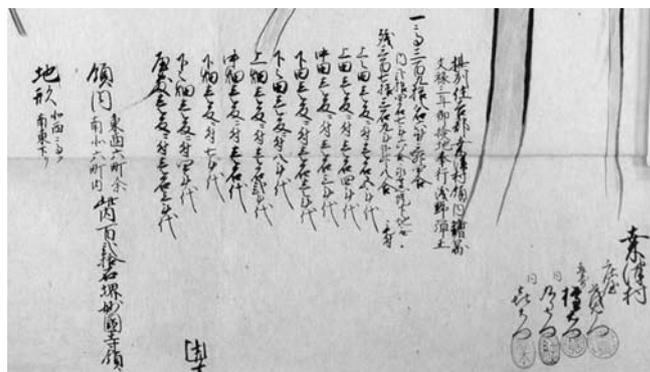
桑津村は、住吉郡の北端、東成郡と隣接する位置にある。目録は、文書目録と絵図目録ならなり、文書目録の内容は、法令、土地、戸口、貢租、村政、農業、用悪水、商業・金融、交通、寺社・家に関わる文書、82点。絵図目録は、桑津村を中心にした村絵図、58点。保存状態はよく、彩色もよく残っている。



7 (部分)



7 (部分)



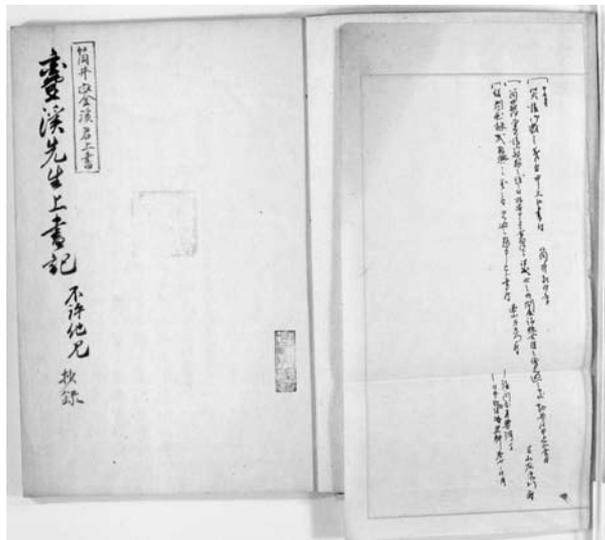
7 (部分)

#### 7 摂州住吉郡桑津村領内絵図

「摂州住吉郡桑津村領内絵図」は、文禄3年(1594)に実施された文禄検地(古検)段階の村高や村内の様子を示している。村の中心は、環濠集落である「居村」で、家数は67軒とある。絵図の作成年代は不明である。ただ、河川の流路から、文禄検地以後から大和川付替以前の情報が描かれていると考えられる。

### 津田秀夫文庫蔵書（古文書目録（3））

津田が収集した蔵書、248点。そのうち写本が69点、刊本が179点。これらの和本には、「津田秀夫蔵書」の蔵書印が捺されている。また、津田による書き込みも見られる。経済・商業・農業の分類に属する書物が多い点は、社会経済史家・津田秀夫文庫蔵書の特徴といえる。



#### 8 『鑾溪先生上書記』

鑾溪先生こと筒井政憲が、老中阿部正弘や牧野忠雅に提出した、政治や海防問題に関する上申書を三通収めた資料。筒井政憲（1778～1859）は、江戸時代後期の幕臣で、長崎奉行、江戸町奉行、大目付格などを歴任している。

津田は、当資料の見返しに罫紙を貼り、3点の書付を摘記している。これらの書付はいずれも、株仲間解散令によって停止されていた株仲間を再興させることを上申したもの。津田は自著『封建経済政策の展開と市場構造』・『封建社会解体過程研究序説』などで株仲間再興令に着目しており、その際利用したものであろう。

8

#### 9 『二葉草』・『地方二葉草』・『牧民類説』

これら3点の書物は、検地や検見など、年貢収納にかかわる事柄について詳細に書かれたもの。『二葉草』と『地方二葉草』には「二葉草」と題された文章が収録されている。内容の相違はほとんど見られない。また『二葉草』に収録された「新田御検地御條目」と『牧民類説』に収録された「新田検地之次第」はともに、享保11年（1726）に発布された「新田検地条目」。「新田検地条目」（『徳川禁令考』所収）と比較すると、『牧民類説』のみに見られる内容も記されている。



9

松代藩真田家大坂御用場関係文書（古文書目録（4））

信濃国松代藩真田家が、大坂に設置した拠点「御用場」にかかる史料、68点。年代がわかる史料は嘉永3年（1850）～文久2年（1862）で、その他の史料も多くは幕末期のものと思われる。真田家と大坂の銀主・加嶋屋や炭屋との書状や、御用場の設立経緯に関する史料がある。



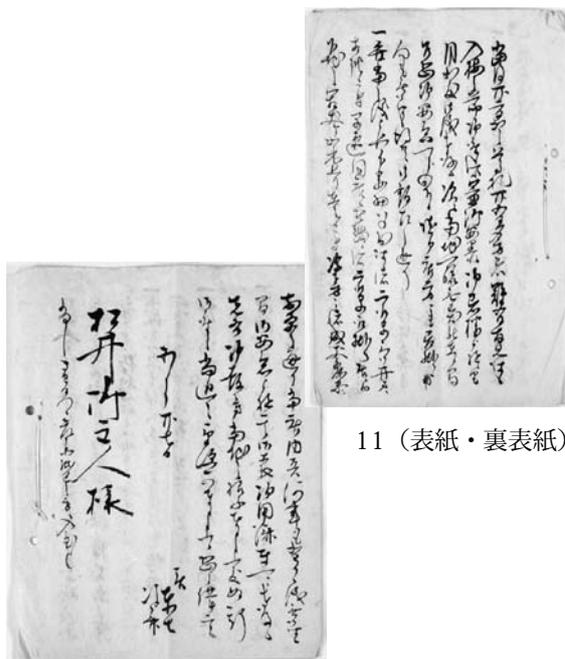
10

10 中山善右衛門宛原主米・権右衛門書状

原主米・権右衛門が中山善右衛門へ宛てた書状。先年に善右衛門の親類・田代庄右衛門が松代まで出かけ、藩主から家臣一同まで謁見したことが記されている。また、加嶋屋又兵衛が御用場設立に尽力したこともわかる。その上で、大坂には甘草の専売取引先である炭屋彦五郎の他に、主だった協力者はなく、松代藩側は善右衛門に対して、親類の田代庄右衛門や加嶋屋又兵衛と相談しながら協力してもらえよう求めている。

播磨国赤穂郡若狭野・浅野隼人家関係文書（古文書目録（6））

播磨国赤穂郡若狭野村（現・兵庫県相生市）に陣屋を構えていた浅野隼人家関係文書、279点。年代は天保5年（1834）から明治14年（1881）にわたり、幕末期が中心。浅野隼人家は、のちに忠臣蔵で有名となる赤穂浅野家から、寛文11年（1671）に分知され、成立した旗本。史料は、大坂御用場・天王寺屋（松井）安右衛門関係、家政・財政関係、幕末政治情報関係の3点の特徴がみられる。



11（表紙・裏表紙）

11 大坂御用場仕法帳

浅野家当主がいる江戸屋敷では家政全般を扱い、年貢・支配に関する実務を若狭野陣屋が担った。大坂御用場（用途）の天王寺屋は年貢米回送などに関与し、家政・財政について大きな役割を果たした。史料11は、天王寺屋の店方・東七と次郎介から、若狭野陣屋に出張中の安右衛門に差し出された報告書。商売向きに関する内容のほか、大坂の火事やはしかの流行など、さまざまな情報が記されている。

長崎関係文書（古文書目録（5））

幕末期の長崎に関わる史料、84点。史料の内容は、長崎会所の貿易記録や会所役人が作成したものなど、幕末期の長崎会所の活動を示す史料群である。



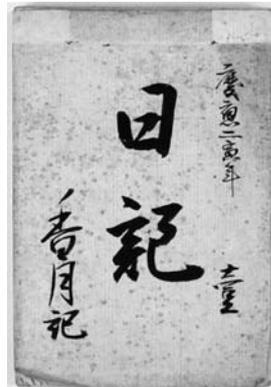
12

12 本売直組帳

弘化2年（1845）に、長崎で行われた貿易の記録書。貿易を担当していた長崎会所と、この年に来航した唐船6艘、オランダ船1艘との間の、輸入品の取引を記録する。史料では、輸入品の名前の上に「賣」や「带回」などの文字がみえるが、これは長崎会所が唐船・オランダ船との間で行った、輸入品の値段交渉の結果を示している。「賣」と記されているものは、取引が成立して輸入されることになった輸入品であり、「带回」（オランダ船の場合は「不」と記されている）とあるのは、取引が成立しなかった輸入品である。



13



14

13 日記

元治元年（1864）に、長崎から大坂へ出張した長崎会所の役人山田政十郎が記した日記。当時、山田は長崎会所小役格であり、輸出品の俵物に関わる銀を運送するため、長崎から大坂に向かっていた。

14 日記 巻

長崎から大坂へ出向いた香月の慶応2年（1866）の日記。この香月という人物は、長崎会所の役人であると考えられる。

奉存候間、同志之者共私惣代を以、

此段乍恐御内意御歎奉申上

呉候様申聞候、以上

文政八年 含翠堂同志中惣代

酉二月十八日 野堂町

土橋七郎兵衛<sup>㊤</sup>

地方

御役所

口代

向暑之節各様弥御安康

奉珍賀候、然者含翠堂

留主居河澄氏、此度無據

退身之義被申出、依之

来廿七日跡取締等御相談

申上度候間、乍御苦勞、早朝<sup>㊤</sup>

含翠堂へ御出席可被下候

右御願申上度、如此御座候、以上

五月廿四日

年番

土橋七郎兵衛

末吉勘四郎様 拜見承知仕候

中瀬九兵衛様 右同断

末吉永五郎様 拜見承知仕候

三上次郎左衛門様 右同断

土橋藤十郎様 右同断

山上栄次郎様 右同断

奥野清之助様 右同断

末吉平三郎様 忝拜見承知仕候

鎌田次左衛門様 忝拜見仕候

三浦八兵衛様 忝拜見仕候

林市右衛門様

次第不同御免

史料5 平野含翠堂関係書簡

餘寒不穩候へ共、弥多祥被成

御入懇然至奉存候、近頃申兼候へ共

含翠堂二而史記并二左氏傳拝借

いたし度候間、何卒貴君以善悪

御取斗御恩借被下度、偏二奉希候

早々頓首

〔封〕 (卷) 封御宥恕

正月十日

土橋七郎兵衛様 原田三七

要用

史料6 平野含翠堂関係書簡

(包紙上巻) 一章 含翠堂

年番

右者我等所持二而、其元江質物二相渡置候所、当未十一月〆来ル申十月迄迄ケ年限、直地借仕度旨申入候得者御得心二而、右屋鋪直地借仕候、尤地借中之御年貢諸役其許名代を以、我等致支配相勤、残銀四拾壹匁六分爲地子無相違、毎年十一月急度相渡可申候、爲後日證文依而如件

寛政十一未年 土橋九郎右衛門<sup>㊤</sup>

十一月

含翠堂

賑窮料同志中

#### 史料4 含翠堂の賑窮（給）事業

乍恐御内意奉願上候

一市町含翠堂之義ハ、御仁恵を以

年々爲地子御米被下置、冥加至極

難在相續仕来候處、享和三年亥

閏正月乍恐

寛敬院様當郷御巡見之砌、

難在被爲 入候御列二而、其後

酒井讚岐守様并 松平和泉守様

大坂表御巡見之節も同様被爲

入候程も難斗旨、大坂御奉行所〆

前以被仰渡候二付、其度々破損取繕

候へとも、何分古建物二而最早修覆難及相成候二付、此度建修覆仕度同志之者共一統念願二御座候得とも

時節柄難及自力罷在候、勿論

賑窮料手當銀等御座候得とも

普請入用二取賄候而ハ荒年臨時

之程、是又一統心配仕居候、依之年賦

返上之御銀拝借御願も奉申上

度、同志之者共一統内存二御座候

得とも、乍恐

御上様二も 御泊城被爲蒙

仰莫太之御物入被爲 在候御時

節奉恐察差扣へ罷在候処、此比

修覆不仕候而ハ棟樑変事之程

相懼、且此後御巡見之砌必至与

差支候故、無據御歎奉願上候ハ、過料

御取上ケ二相成候、御銀之内三貫目

御憐愍を以、来ル午年迄十ヶ年之

間、同志之内林市左衛門・中瀬九兵衛

兩人江御預ケ被成下度奉願上候、左候ハ、

右御銀を以早速修覆仕度奉存候、

尤御預ケ二相成、臨時御入用二被爲

在候ハ、不抱年限右市左衛門・九兵衛

兩人より何時二而も相弁上納可仕候

間、御慈憐を以、願之通御聞濟

被爲 成下候ハ、廣太之御恩難在

## 4. 史料翻刻

## 史料1 含翠堂三輪先生(執齋)講説記録

享保九年三輪先生平野

辰四月廿三日夜於友直新宅

所謂誠其意——傳文ハ経文ノ教ヲ身ニ□ク取りテ行フヘキ

○手ヲ下□処ヲ説ル也

廿四日 於含翠堂

大学之道在明——大学ハ学問ノ尊称也

学ハ覚ノ字ノ意○道トハ道スズ也○親トハ彼我無

間ヲ云ナリ○止トハスハリテイコカヌヲ云、安身スルヲ云ナリ

○能トハナナル、事ナリ○得トハ手ニ入ル事ナリ○物モノモコトモ一ツ也

○事トハ知止ハワザノ始能得ハワザノ終ナリ○近トハ困

勤ノ工夫ナリ○道トハ大学ノ道ノ道ノ字ナリ

廿五日同断

○古之欲明——コト古ヘヲ師トセサルハ道ニ非スト云ヘリ

故ニ古之ト云ヘリ

シルシヲ語レハ天下平ナリト云イヘリ、工夫ヲ論スル

寸ハ明々徳ト云ヘリ○欲ノ字重シヲモヒ子カフ事也

○心ハカナメノ如シ、意ハホ子ノ如シ○致知格物ハ誠意ノ作

用ナリ意ノ在処物意ノテル処ハ知

廿五日夜三村氏宅

○詩云瞻彼——コ、ハ格物ノシヤウナリ

心廣腴胖ナル君子ノ事ヲ云ヘリ○克ハシツハリ

トタヘコタユル事也、コノ語誠意中ノ事也

## 史料2 含翠堂修復銀の拝借願

一屋敷高拾石八斗四升三合

寛保貳戌年十一月廿三日地下ノ平野郷内

惣地持手作之高被相改候時ニ、此方持高之内

ニテ、如斯屋敷高ヲ引、残り田畑高二致シ手作

本斗ヲ書付上ル、但地持手作致候様ニとの云付也

貳拾六歩と地下ノ合セ束

一畑ノ三町九反壹畝壹歩

同ノ三反四畝貳拾四分 さち分

五畝四歩ト地下ノ合セ束

同ノ貳反四畝貳拾貳歩 いく分

寛保三亥年六月十五日賑給料へ麦御集可被遊由、

御地頭様を被仰付、惣持高之内ニテ畑方斗ぬき出シ、

畑一反二付あら麦壹升ツ、賑給料ニたくハへ置候積ニテ

地下ノ被申付、如斯相改書附遣ス

## 史料3 含翠堂の賑窮(給)事業

屋鋪地子證文之事

市町河骨池舟入東側 七百七十六

一屋鋪貳畝九歩 分米四斗六升

市町河骨池舟入東側 七百八十五

一屋鋪貳拾五歩 分米壹斗六升七合

反畝合

# 牧村史陽氏旧蔵写真

関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センターが所蔵する牧村史陽氏旧蔵写真は、『大阪ことば事典』・『難波大阪』などの著作で知られる郷土史家、牧村史陽氏が撮影した写真史料である。

写真には、今はもう見るできない大阪の風景が写されており、近代大阪の文化遺産を研究する上で、貴重な史料であるといえる。牧村史陽氏旧蔵写真の中には、紙焼写真のほかに、大量のガラス乾板も含まれていた。今回の企画展では、これらの写真から 35 点を選び展示する。

また牧村史陽氏は、『大阪人物事典』で紹介されるように、無類のコレクターでもあった。当センター所蔵の史料にも、写真以外のコレクションが多数含まれており、これらもあわせて展示する。

## 1. 町人学者・牧村史陽

牧村史陽 (1898 ~ 1979) は、明治 31 年 (1898)、大阪船場の木綿問屋に生まれた。大阪大倉商業学校 (現・関西大倉高校) を卒業後、独力で大阪の郷土史調査を積み重ねた。「郷土史は足で書け」を持論とし、大阪のありとあらゆる場所へおもむいては、調査地の光景を写真に収めて歩いた。晩年の大作『難波大阪』の著述においても、その付録篇の中で、「自慢ではないが、どこにどんなものがあるかはほとんど知りつくしているつもりである」と自負しつつも、新しく稿を起こすとすると、改めて現地を確かめてみなければペンを持つ気になれない、徹底した実地主義を貫いている。

大阪船場に生まれた浪華っ子らしく大阪弁に深い愛着を抱き、「大阪ことばの会」を結成して昭和 30 年 (1955) に『大阪方言事典』を刊行した。しかし、五千語以上を収録したこの書物でさえも、おそるべき熱意の人、牧村史陽にとってははまだものならず、その後さらに二十数年間にわたって増補・改訂を加え続け、昭和 54 年に『大阪ことば事典』として再刊されたのをもちょうやく、「いちおうの纏まりがついたものと考えている」(『大阪ことば事典』はしがき) と得心してみせた。

生涯現役であることを願い、百歳をこえて 21 世紀までも研究を続けていたいと語った牧村史陽であったが、昭和 54 年 4 月、81 歳で没した。昭和 53 年に大阪文化賞を受賞。

### 校訂跡のある『大阪方言事典』

『大阪ことば事典』(講談社) は、牧村史陽の最も著名な著書の一つである。『大阪ことば事典』の刊行は昭和 54 (1979) 年だが、昭和 30 年には、その前身である『大阪方言事典』(杉本書店) が刊行されていた。『大阪ことば事典』「はしがき」には、『大阪方言事典』刊行後に書き留めた新原稿が、かなりの量に達したので、新たに『大阪ことば事典』を刊行したことが記されている。

当センターが所蔵する牧村史陽氏旧蔵品の中に、使い込まれて擦り切れそうな『大阪方言事典』がある。牧村史陽の手による書き込みや、メモの貼付けがいたるところにあり、刊行後も 20 数年をかけて校訂を加え続けた痕跡をうかがうことができる。



校訂跡のある『大阪方言事典』



郷土史研究会誌『佳陽』

### 郷土史研究会誌『佳陽』

牧村史陽は、『佳陽会』という郷土史会を主宰していた。その機関誌として発行されていたのが、『佳陽』である。



『スクラップ大阪』

### 『スクラップ大阪』

『スクラップ大阪』は、謄写版で100部限定という、ごく小規模な雑誌である。内容は、大阪に関する新聞記事を収集して整理したもので、牧村史陽が主宰した「大阪ことばの会」の会報である『大阪辯』の別冊という位置づけで刊行された。

売れない本だということがこれだけ、はっきりわかっているものも少ないだろう。商売にならないから誰も手をつけない。しかし、何とかしてやって見たい。大阪のために、現代の大阪の記録を残すために—

(『スクラップ大阪』第一集より)

### 商品券、入浴券など

牧村史陽が旧蔵していた品々の中には、マッチ箱のレットルの他に、まさに「こんなもの何の役に立つか」(『大阪人物事典』)と思わせるものもある。「2銭」の商品券は、戦前のものと考えられるが、第二次世界大戦後の新円切替によって、利用不可能になったはずである。「大阪市共通」と書かれた入浴券は、期限が明治33年(1900)6月で切れており、明治31年生まれの牧村史陽が、なぜこんなものを手元に置いていたのか。七曜表は昭和16年(1941)のもの、昭和26年のものであるが、保存状態が極めてよく、実際に使用した形跡もない。



商品券、入浴券など



マッチ箱のレツテル

### マッチ箱のレツテル

当センターが所蔵する史料の中には、牧村史陽撮影の写真だけでなく、牧村が収集した雑多な品も含まれている。三善貞司編『大阪人物事典』（清文堂出版）に紹介される「マッチ箱のレツテル」もあり、その点数は63点にのぼる。マッチ箱のレツテルはいずれも、単に市販されているものではなく、店の宣伝用やタバコの景品として配布されたもので、丹念に見れば一点一点、当時の社会の世相を読みとることができる。

三善貞司は、牧村史陽を次のように紹介している。

彼はまた無類のコレクターであった。それもしょうもないものを集めるマニアだ。乗物の切符、汽車弁などの包紙、箸入れ袋、マッチのレツテル、こんなもの何の役に立つかと眉をひそめるガラクタの山が書齋を占めている。無論古い大阪の写真・史蹟資料・新聞雑誌のスクラップ、取材メモ等は膨大なもので、しかもそれらが綺麗に整理され、どこそこの古墓といえは手品のような手つきでたちまち引き出してくる。

（『大阪人物辞典』より）

## 2. 「郷土史は足で書け」 — 『難波大阪』とその資料写真—

牧村史陽の持論である「郷土史は足で書け」を最もよく体現した著作が、『難波大阪』である。『難波大阪』が昭和50年(1975)に刊行されたとき、牧村史陽は77歳であった。しかし『難波大阪』付録篇の中で牧村は、衰えることを知らぬ熱意を語る。「だが、ほんとうのところ、これでは私はまだ不満足なのだ。もっと書き加えたい。(中略)しかしそんなことまで書いておれば、この二倍の分量があってもおさまらない」(『難波大阪』付録篇)。当センター所蔵の牧村史陽氏旧蔵写真には、『難波大阪』掲載写真の原版が含まれている。



1 高津宮 (撮影年不明)

### 1 高津宮 (大阪市中央区高津)

高津宮は、もと大阪城付近にあったものが、文禄3年(1594)に現在地(大阪市中央区高津)に移転したとされる。高層建築のない時代には、市中随一の展望所だった。



2 難波宮発掘 (昭和36年10月13日撮影)



3 難波宮発掘 (昭和44年9月6日撮影)

### 2・3 難波宮発掘 (大阪市中央区法円坂)

写真2は天平16年(744)に都とされた、難波宮跡の発掘風景。写真3は、出土した瓦の写真である。



4 花外楼（撮影年不明）



5 花外楼（撮影年不明）

#### 4・5 花外楼（大阪市中央区北浜）

写真4は大阪市中央区北浜にある老舗料亭「花外楼」の写真。扁額（写真5）は木戸孝允の揮毫である。



6 食野家四十八蔵（昭和38年3月13日撮影）

#### 6 食野家四十八蔵（泉佐野市元町）

泉佐野には、江戸時代に食野家という廻船問屋があり、大きな勢力を持っていた。泉佐野市元町には、現在も廻船問屋食野家の蔵がわずかに残っている。



7 帝国座の跡（昭和 25 年撮影）

### 7 帝国座の跡（大阪市中央区北浜）

川上音二郎が建てた帝国座の跡。写真には「大阪カトリック教会」の看板がみられるが、現在は「帝国座跡」の石碑が立つのみである。



8 大正橋（昭和 42 年 9 月 9 日撮影）

### 8 大正橋

（大正区三軒屋東～浪速区木津川）

大正橋は、千日前通の大正区三軒屋東と浪速区木津川との間に架かる橋である。大正 4 年（1915）に、市電の開通にともなって建設された。大正区の命名は、この橋に由来する。



9 新清水玉出の滝（撮影年不明）

### 9 新清水玉出の滝（大阪市天王寺区伶人町）

大阪市天王寺区伶人町の清水寺には、市内唯一の滝「玉出の滝」がある。滝に打たれて修行する光景は、現在でも時折見られる。



10 口縄坂（昭和36年10月16日撮影）

**10 口縄坂（大阪市天王寺区下寺町）**

「天王寺七坂」の一つ、口縄坂の写真。坂の名は、見下ろした様子が蛇に似ているところから出たものと言われる。



11 杭全神社（撮影年不明）

**11 杭全神社（大阪市平野区平野宮町）**

大阪市平野区にある、杭全神社の風景。杭全神社は、坂上田村磨の子、広野麿が杭全荘を荘園として賜ってこの地に居を構え、その子当道が貞観4年（862）に氏神として創建したと伝えられる。



12 四天王寺・安産の石橋（撮影年不明）

**12 四天王寺・安産の石橋**

（大阪市天王寺区四天王寺）

現在、四天王寺本坊奥庭に石棺の蓋が置かれている。もとは亀井水の南の小溝に橋として架けられており、この橋を渡ると安産になると伝えられていた。

### 3. 牧村史陽氏旧蔵写真の中に残る大阪

当センター所蔵の牧村史陽氏旧蔵写真には、今はもう見るできない「大阪の風景」が残されている。ここでは、膨大な量の写真から、24点を選んで展示している。



『佳陽』84号

もし私が死んだら、これらのコレクションをどう処分したらよいかと時折り考えてみることもあるが、それについては去年、大島市長にも話したことがあり、市の図書館あたりでも引き受けてくれるとええのやけど、それにしても吏員の一人がそのためかかりづめにかかってくれねばなるまい。

(史陽自伝その一)

(『佳陽』84号、昭和53年12月より)



13 垂水神社付近 (昭和34年10月25日撮影)

#### 13 垂水神社付近 (吹田市垂水町)

#### 14 千里山付近 (吹田市千里山西)

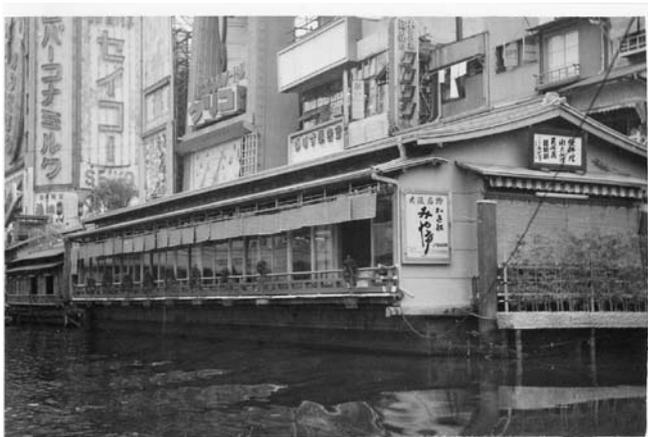
ともに関西大学付近の風景。

写真13は垂水神社の参道である。鳥居からのびる参道約100メートルの両側には住宅が建ち並んでいる。垂水神社は『延喜式』神名帳に記載される式内社であり、かつては境内に摂津第一の名水とされた滝が流れ落ちていた。

写真14は、千里山駅から西に坂を登った場所にある「千里山第1噴水」である。千里山住宅地は、大正9年(1920)の大阪住宅経営株式会社の設立とともに始まった。この噴水と周囲の広場は、千里山住宅地の開発当初から中心地として設計されていた。



14 千里山付近 (昭和38年10月20日撮影)



15 戎橋(昭和31年9月13日撮影)



16 戎橋(昭和31年9月14日撮影)



17 戎橋(昭和36年12月8日撮影)

#### 15・16・17 戎橋(大阪市中央区道頓堀)

大阪の庶民的なにぎわいをみせる、戎橋の風景。「かに道楽」道頓堀店が昭和37年(1962)に開店する以前の光景である。現在、「かに道楽」がある位置にみられる雪印のネオン看板は、現在はグリコのネオンの隣に移動している。写真15・16の「クロバーコナミルク」は、昭和33年に雪印に合併されたクロバー乳業のもの。

川べりには牡蠣船が営業している。道頓堀や土佐堀川、堂島川などでの牡蠣船は、かつて大阪名物の一つに数えられていたが、昭和40年に道頓堀川の防波堤工事が実施されたため、それ以降、道頓堀川から牡蠣船の風景は姿を消した。



18 大阪球場（昭和29年6月3日撮影）



19 大阪球場（昭和29年6月3日撮影）



20 大阪球場（昭和29年6月3日撮影）

### 18・19・20 大阪球場

#### （大阪市中央区難波）

大阪球場前の風景。大阪球場は、昭和25年(1950)にプロ野球の南海ホークス(現ソフトバンクホークス)のホームグラウンドとして建設された。写真の昭和29年当時は、ほかに近鉄パルス、大洋松竹ロビンス(現横浜ベイスターズ)と、同時に3球団のホームグラウンドでもあった。

写真20では、大阪球場の手前の難波新川が埋め立てられている。江戸時代、大阪球場のあった場所には、幕府の米蔵である難波御蔵が建っていた。難波新川は、難波御蔵へ米を運ぶために、享保18年(1733)に開鑿された堀川である。

現在は大阪球場があった場所に「なんばパークス」が建っている。



21 谷四（昭和44年9月9日撮影）



22 谷四（昭和44年9月9日撮影）

### 21・22 谷四（大阪市中央区谷町）

モータリゼーションの進展にともない、昭和40年代から、大阪の街に阪神高速道路が建設されはじめた。街中を走る高架道路は、大阪の風景を大きく変えることになった。

写真21・22は谷町4丁目の風景。阪神高速13号東大阪線は、昭和44年（1969）に信濃橋から法円坂までの区間が開通した。写真には、建設工事中の高架が見える。

### 23 難波橋

（大阪市中央区北浜～北区西天満）

昭和5年（1930）に御堂筋の拡幅工事が行われるまで、大阪を代表する主要道路は堺筋であった。難波橋は、土佐堀川・中之島公園・堂島川にまたがっている橋で、北詰は西天満1丁目、中間は中之島1丁目、南詰は北浜2丁目となっており、橋上を堺筋が通る。

橋詰の4か所にライオン像が設置されたことから、「ライオン橋」の愛称で市民に親しまれている。写真では難波橋の上を市電が通るが、大阪市電は昭和44年には廃止された。



23 難波橋（撮影年不明）



24 東横堀川まがり（昭和38年10月3日撮影）



25 東横堀川まがり（昭和27年5月29日撮影）

#### 24・25 東横堀川まがり

（大阪市中央区本町）

写真24・25は東横堀川の風景。東横堀川は本町橋と農人橋の間で「まがり」と通称されるS字カーブを描いて流れる。現在は、東横堀川の上には阪神高速道路1号環状線が通っており、この写真ほど東横堀川を見通すことは難しい。



26 一心寺（昭和32年5月19日撮影）

#### 26 一心寺（大阪市天王寺区逢阪）

骨仏で有名な一心寺の納骨堂落慶の風景。一心寺には、現代建築のモダンな山門がそびえ立つ一方で、宝珠塔形総檜造りの伝統的な納骨堂がたたずむ。この納骨堂は、昭和32年（1957）に再建されたものである。写真は再建されたばかりの納骨堂の落慶法要で、写真中の看板に「御骨佛開眼 納骨堂落慶 大法会」の文字が見える。



27 新町通 (昭和 25 年頃撮影)



28 新町吉田屋 (昭和 29 年 7 月 17 日撮影)



29 関西電力春日出第 2 発電所  
(昭和 33 年 10 月 19 日撮影)

## 27 新町通

## 28 新町吉田屋 (大阪市西区新町)

新町は、江戸時代に公許された大坂唯一の遊廓であった。その豪華さは、井原西鶴の『好色一代男』に「京島原の女郎に、江戸吉原の張りを持たせ、長崎丸山の衣装を着せ、大坂新町の揚屋で遊びたし」とうたわれるほどであったが、第二次世界大戦の戦災でほぼすべてが焼失した。

写真 27 は、戦後間もない頃の新町通だが、すでに往時の華やぎはない。江戸時代には、近松門左衛門の『夕霧阿波鳴渡』で有名な吉田屋という揚屋があったが、これも戦災で焼失した。写真 28 の「吉田屋」は戦後に規模を縮小して再築したものか。



30 関西電力春日出第2発電所（昭和31年9月13日撮影）



31 関西電力春日出第2発電所（昭和31年9月13日撮影）



32 関西電力春日出第2発電所（撮影年不明）

**29～32 関西電力春日出第2発電所  
（大阪市此花区北安治川通）**

8本の煙突が空を圧するこの建物は、関西電力の春日出第2発電所である。春日出第2発電所は大正11年(1922)に建設された。4本の煙突が2列に配置され、見る位置によって、さまざまな本数に見え、「八本煙突」と呼ばれて親しまれていた。当時は石炭を燃料とした火力発電であったが、大阪の人口増加にともなって発電能力を強化するために重油による火力発電に切り替える必要があり、「八本煙突」は昭和36年(1961)に解体された。



33 旧堺紡績（昭和51年2月10日撮影）



34 旧堺紡績（昭和51年2月10日撮影）



35 旧堺紡績（昭和51年2月10日撮影）

**33・34・35 旧堺紡績（堺市堺区戎島町）**

堺最古のレンガ建築、旧堺紡績の工場の写真。明治3年(1870)に創業した堺紡績は、官営工場となったのち、明治11年に民間に払い下げられた。建設当初は見学人が多数訪れ、工場の錦絵も発行されるほどであった。

昭和8年(1933)に閉鎖され、牧村史陽が撮影した昭和51年当時には、取り壊した跡地に府営住宅を建設することが決定していた。現在は跡地に「堺紡績所跡」の案内看板が立つのみである。

## 企画展「なにわ・大阪の文化力～大阪文化遺産学の源流と系譜を辿る～」出品目録

### 本山コレクション金石文拓本

No.	資料名	作成年	形状	点数	所蔵
1	本山彦一翁蒐収目録1(石器時代遺品目録)			一冊	関西大学総合図書館
2	本山彦一翁蒐収目録2(恩賜京都博物館陳列品説明概要)			一冊	関西大学総合図書館
3	本山彦一翁蒐収目録3(刀装具各種)			一冊	関西大学総合図書館
4	富民協会農業博物館本山考古資料室目録	昭和8年		一冊	関西大学総合図書館
5	富民協会農業博物館本山考古資料室図録	昭和8年		一冊	関西大学総合図書館
6	『阡陵』第10号(肥田皓三氏論文)	昭和59年		一冊	
7	『撰河泉金石文』	大正3年		一冊	関西大学総合図書館
8	『大日本金石史』1～3	大正10年		一冊	関西大学総合図書館
9	『大坂金石史』	大正11年		一冊	関西大学総合図書館
10	本山彦一氏旧蔵『大日本金石史』1・3	大正10年		一冊	関西大学総合図書館
11	船王後墓誌銘拓本			一紙	関西大学博物館
12	伝聖徳太子墓誌銘拓本			一紙	関西大学博物館
13	石川年足墓誌銘拓本		軸装	一幅	関西大学博物館
14	高屋枚人墓誌銘拓本		軸装	一幅	関西大学博物館
15	金剛峯寺鐘銘拓本		軸装	一幅	関西大学博物館
16	慈光寺鐘銘拓本		軸装	一幅	関西大学博物館
17	赤松麟作版画集大阪三十六景のうち「道頓堀」			一紙	
18	近松門左衛門夫妻墓碑拓本			三紙	関西大学博物館
19	坂田藤十郎墓碑銘拓本		軸装	一幅	関西大学博物館
20	初代竹本義太夫墓碑拓本			三紙	関西大学博物館
21	井原西鶴墓拓本		軸装	一幅	関西大学博物館
22	中村歌右衛門(三世)墓碑銘拓本		軸装	一幅	関西大学博物館

### 津田秀夫文庫古文書

23	高等師範学校時代の日記「木の葉のうらに」			一冊	大阪市史編纂所
24	大学時代のノート「歴史哲学の諸問題」			一冊	大阪市史編纂所
25	資料ノート(第一集 昭和24年度)	昭和24年		一冊	大阪市史編纂所
26	ノート「享保期」			一冊	大阪市史編纂所
27	ノート「寛政の改革」			一冊	大阪市史編纂所
28	ノート「幕末史研究ノート」			一冊	大阪市史編纂所
29	手書原稿「江戸期の教育者の経済生活の一面」			一冊	大阪市史編纂所
30	手書原稿「封建社会が崩壊して…」			一冊	大阪市史編纂所
31	論文「堺を指す言葉」(『民間伝承』8の1)	昭和17年		一冊	関西大学総合図書館
32	著書『江戸時代の三大改革』	昭和31年		一冊	個人蔵
33	著書『封建社会解体過程研究序説』	昭和45年		一冊	個人蔵
34	著書『新版 封建経済政策の展開と市場構造』	昭和52年		一冊	個人蔵
35	著書『日本の歴史2 天保改革』	昭和50年		一冊	個人蔵
36	著書『幕末社会の研究』	昭和52年		一冊	個人蔵
37	著書『近世民衆運動の研究』	昭和54年		一冊	個人蔵
38	著書『史料保存と歴史学』	平成4年		一冊	個人蔵
39	編著『明治国家成立の経済基盤』	昭和41年		一冊	個人蔵

40	編著『解体期の農村社会と支配』	昭和 53 年	一冊	関西大学総合図書館
41	編著『近世国家の成立過程』	昭和 57 年	一冊	関西大学総合図書館
42	編著『近世国家の展開』	昭和 55 年	一冊	関西大学総合図書館
43	編著『近世国家の解体と近代』	昭和 54 年	一冊	個人蔵
44	編著『近世国家と明治維新』	平成元年	一冊	関西大学総合図書館
45	津田秀夫先生古稀記念会編『封建社会と近代』	平成元年	一冊	関西大学総合図書館
46	著書『わたしと歴史学』	昭和 54 年	一冊	大阪市史編纂所
47	論文「後期封建社会に於ける平野郷町の人口変遷」『ヒストリア』2号	昭和 28 年	一冊	関西大学総合図書館
48	大阪歴史学会編『封建社会の村と町』	昭和 35 年	一冊	個人蔵
49	大阪歴史学会編『近世社会の成立と崩壊』	昭和 51 年	一冊	個人蔵
50	津田秀夫先生を偲ぶ会編『津田秀夫を偲ぶ』	平成 5 年	一冊	
51	津田秀夫先生を偲ぶ会編『津田秀夫を偲ぶ』(二)	平成 6 年	一冊	
52	摂州欠郡之内名出候事書写(廻状)	(慶長 5 年)	一紙	一点 関西大学文学部古文書室
53	著書『近世民衆教育運動の展開』	昭和 53 年	一冊	個人蔵
54	史料翻刻(『平野郷町覚書』享保十年(1))		一冊	大阪市史編纂所
55	史料翻刻(『平野郷町覚書』享保十年八月より)		一冊	大阪市史編纂所
56	平野関係研究(1)(ノート)		一冊	大阪市史編纂所
57	含翠堂三輪先生(執斎)講説記録	享保 9 年	一紙	一点 関西大学文学部古文書室
58	乍恐御内意奉願上候(含翠堂修復銀の拝借願)	文政 8 年	一紙	一点 関西大学文学部古文書室
59	賑給料(さち分 いく分)改書		一紙	一点 関西大学文学部古文書室
60	屋鋪地子証文之事	寛政 11 年	一紙	一点 関西大学文学部古文書室
61	回章(含翠堂留守居河澄氏退身)	(安政 3 年)	一紙	一点 関西大学文学部古文書室
62	書状(含翠堂にて史記・左氏伝借用願)		一紙	一点 関西大学文学部古文書室
63	摂州住吉郡桑津村領内絵図(文禄検地絵図)			一点 関西大学文学部古文書室
64	『鑾溪先生上書記』		豎帳	一冊 関西大学文学部古文書室
65	『二葉草』		豎帳	一冊 関西大学文学部古文書室
66	『地方二葉草』		豎帳	一冊 関西大学文学部古文書室
67	『牧民類説』		豎帳	一冊 関西大学文学部古文書室
68	中山善右衛門宛原主米・権右衛門書状		一紙	一点 関西大学文学部古文書室
69	大坂御用場仕法帳	(慶応 2 年)	豎帳	一点 関西大学文学部古文書室
70	本売直組帳	弘化 2 年	豎帳	一点 関西大学文学部古文書室
71	日記	元治元年	横半帳	一点 関西大学文学部古文書室
72	日記 壺	慶応 2 年	横半帳	一点 関西大学文学部古文書室

#### 牧村史陽氏旧蔵写真

73	高津宮		写真紙焼	一点
74	難波宮発掘①	昭和 36 年	写真紙焼	一点
75	難波宮発掘②	昭和 44 年	写真紙焼	一点
76	花外楼①		写真紙焼	一点
77	花外楼②		写真紙焼	一点
78	帝国座の跡	昭和 25 年	写真紙焼	一点
79	大正橋	昭和 42 年	写真紙焼	一点
80	食野家四十八歳	昭和 38 年	写真紙焼	一点
81	新清水玉出の滝		写真紙焼	一点
82	口縄坂	昭和 36 年	写真紙焼	一点

83	杭全神社		写真紙焼一点
84	四天王寺・安産の石橋		写真紙焼一点
85	戎橋①	昭和 31 年	写真紙焼一点
86	戎橋②	昭和 31 年	写真紙焼一点
87	戎橋③	昭和 36 年	写真紙焼一点
88	大阪球場①	昭和 29 年	写真紙焼一点
89	大阪球場②	昭和 29 年	写真紙焼一点
90	大阪球場③	昭和 29 年	写真紙焼一点
91	谷四①	昭和 44 年	写真紙焼一点
92	谷四②	昭和 44 年	写真紙焼一点
93	東横堀川まがり①	昭和 38 年	写真紙焼一点
94	東横堀川まがり②	昭和 27 年	写真紙焼一点
95	難波橋		写真紙焼一点
96	新町通	昭和 25 年	写真紙焼一点
97	新町吉田屋	昭和 29 年	写真紙焼一点
98	一心寺	昭和 32 年	写真紙焼一点
99	垂水神社付近	昭和 34 年	写真紙焼一点
100	千里山付近	昭和 38 年	写真紙焼一点
101	旧堺紡績①	昭和 51 年	写真紙焼一点
102	旧堺紡績②	昭和 51 年	写真紙焼一点
103	旧堺紡績③	昭和 51 年	写真紙焼一点
104	関西電力春日出第 2 発電所①	昭和 31 年	写真紙焼一点
105	関西電力春日出第 2 発電所②	昭和 31 年	写真紙焼一点
106	関西電力春日出第 2 発電所③	昭和 33 年	写真紙焼一点
107	関西電力春日出第 2 発電所④		写真紙焼一点
108	マッチ箱のレットル		
109	商品券		二枚
110	入浴券		二枚
111	七曜表 昭和 16 年		一点
112	七曜表 昭和 26 年		一点
113	郵便切手		二点
114	『スクラップ大阪』第一集	昭和 26 年	二冊
115	『スクラップ大阪』特輯	昭和 26 年	一冊
116	『佳陽』	昭和 32 年	一冊
117	『大阪方言事典』	昭和 30 年	一冊
118	『大阪ことば事典』	昭和 59 年	一冊 個人蔵
119	『難波大阪』	昭和 50 年	一冊
<b>関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター収集資料</b>			
120	大阪名所新画図	明治 24 年	一点
121	大日本大阪名所廻双六	明治 31 年	一点
122	菅橋彦画 藤沢南岳賛「猿田彦」	大正 3 年	一点
123	長島侯増山雪斎独楽園賀詞帖		

※所蔵の表記がない資料は、関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター所蔵。

## 津田秀夫先生—その人と学問

奥田 晴樹



### はじめに

金沢大学の奥田でございます。どうぞよろしく  
お願いいたします。

この会でお話する件は、はじめ藪田貫先生から  
森安彦先生にご相談がありました。森先生は、  
津田秀夫先生の東京教育大学時代の私ども門弟の  
師範代とでも申し上げるべきお方で、信州大学教  
授、国立史料館長、中央大学教授でいらした方で  
す。森先生のお話しでは、大阪に比較的近いところ  
におり、また教育大の最後の方の教え子で、関  
西大学のつながりの話も少しはできるだろうとい  
うことで、私に白羽の矢が立ったようです。今日  
は、先生の人となりと学問について、私の理解す  
る範囲でお話いたします。また、時間がありま  
すれば、先生と私との関わりについてもお話をさ  
せていただければと思います。

### 1. 津田秀夫先生とは？

津田先生とは、そもそもどういうお方か。先生  
はご還暦のお祝いの会のときに記念の小冊子を参  
会の方々にお配りになられていますが、その中に  
自伝的なものが書かれております。それと、私ど  
もが直接伺ったお話など。これらを手がかりにお  
話しいたしましょう。

先生のご先祖は尾張の岩倉の城主であった織田  
の一族で、これは信長に滅ぼされるんですが、そ  
の関係だろうと。この岩倉城主は普通、信安とい  
うんですが、それについてもこの小冊子の中で、  
先生らしくいろいろ考証をされておられます。

直接的なご先祖は津田小掃部という人で、この

方が山内一豊の与力に秀吉によってつけられるん  
ですね。後に客分扱いになって、そして家臣化し  
ていくと。したがって、津田家のご先祖は、長  
宗我部の遺臣でも、もともと土佐の住人でもない、  
ということなんですね。山内と同様、やはり山内  
とともに土佐へ入ってきた武士だったということ  
です。

実はこれ、農林省の農政調査会が『小作騒動に  
関する資料集』というのを 1950 年代に作ってい  
るのですが、その中に、「高知県土佐郡浦戸町津  
田家文書」と入っています。よく見ますと後ろに  
「提供者・津田秀夫」とちゃんと書いてあり、先  
生がご自分の史料を提供されているのです。先生  
も自伝の中で書かれているのですが、この浦戸町  
は、たまたま訴訟を起こしたときに住んでいた場  
所で、津田先生の本来のお住まいは高知市内で、  
しかも土族ですから大手筋に住んでおられたそう  
です。先生も自伝ではっきり書いておられますが、  
いわゆる「土族の没落」という事情で住所も移っ  
た、ということのようです。

先生のお父様の馬喜さんが幼少のとき、奥西川  
というところに所有地があり、そこの小作と紛議  
になった、その関係の史料なのです。この史料は、  
丹羽邦男さんが『形成期の明治地主制』という本  
の中で使われています。丹羽さんは、もうお亡く  
なりになりましたが、地租改正研究の大家で、こ  
の本も大変良い出来栄えのものです。しかし、画  
竜点睛を欠くと申しましょか、津田家の史料を  
読み間違いされている。

一つは、津田先生の家系を「郷土」というふう  
に見ているということです。これは、先程申し上  
げましたように、歴とした武士ですから、違いま  
す。もう一つは、津田家が、この訴訟に結果的に  
は勝つのですが、勝訴後、地主として発展してい  
たらと推定をされていることです。先生よくお  
笑いになっておられたのですけれど、そんなこと  
はあり得ない、地主として発展していたら今の自  
分はない、と。実は訴訟費用のために津田家は経  
済的に破綻してしまいます。結局、所有地も皆手  
放すことになり、そして一家を挙げて大阪へお出  
になられ、今宮に居を据えられた。これが大阪人・  
津田秀夫の始まりなのです。

先生は、1918 年の、丁度 8 月に起こる米騒動

の直前、6月にお生れになります。何か騒々しい時代の雰囲気なかでお生まれになった。何となく先生のお人柄を知られる方は、よくおわかりだと思えますが、そういう雰囲気です。

そして、今宮中学から東京高等師範学校に行かれるんです。先生も私どもにもよくおっしゃっていましたが、家計がなかなか厳しかったようです。それで、当時の高師というのは、そういう家の子弟が行く学校としては条件がよかったですね。先生は単身上京されまして、東京高師の文科に入られます。最初は医者になろうとされていたらしいのです。自伝に「無謀にも」とお書きになっていますが、結局は文科に入られて国史学を専攻される。

ここで実は柳田國男と出会うわけです。東京高師、そして東京文理科大学の国史の学生の中で、和歌森太郎先生を筆頭として、柳田に師事して「木曜会」という勉強会がつくられる。そこから、今日の日本民俗学の、いわば本流が発祥してくるわけですが、先生はそのメンバーに入っておられたのです。ですから、先生の研究者としての最初の振り出しは、今回の展示にも当時の論稿が出ていますが、民俗学者としてなんです。とても後の、精巧な社会経済史家・津田秀夫というイメージとは違うのですね。実は非常に幅の広い学問をやってらっしゃった。

その民俗学に対する関心は終生続いておられて、教育大時代にも、先生が図書館から借り出した民俗学関係の雑誌をたくさん小脇に抱えて、片っ端からコピーにとっておられる姿をよく拝見いたしました。そういうこともずっとやっておられたんです。だから、やはり自分が志した学問については、常に関心を持ち続けておられたという。これは申し上げておいてよろしいことかと思えます。

卒業論文は、中世の興福寺・春日大社の世俗時代に関する、つまり、中世史の論文を書かれたということです。そして、先ほどもご紹介ありましたように、岐阜県の中津の農林学校に就職されるんですが、即日入営というような形で、堺で戦車兵になられます。先生は大変声が大きい。これは、実は戦車というのは、指揮官が上に座っていて、下にいる運転手の頭の、丁度左右の耳の辺りを長靴で蹴っ飛ばして、それで「右へ行け、左へ行け」

と指示する。先生ご自身の説明ですから真偽のほどはわかりませんが、それで先生は耳がダメになり、ともかく非常に声が大きくなった、と。亡くなられた立教大学の林英夫先生、あの方は海軍で、伝声管を使っていたので、あの方も声が大きい。声の大きさではこのお二人が、陸軍と海軍の出身の代表だなんて、よくお二人でお笑いになってお話しされているのを覚えております。

そして、広島で船舶気象業務に携わられまして、実は原爆が落ちる少し前に上海へ転勤になったんです。これで原爆に遭わないで済んだということもおっしゃっています。そして、上海で終戦を迎えられます。これも先生のお話ですが、関東軍じゃありませんけれども、上級将校がみんな早く引き揚げてしまうのです。それで、誰も民間人の引き揚げの面倒を見る者がいない。最後に自分が、上官と喧嘩して踏みとどまって、引き揚げの送還業務をやった、と。そのためでしょう、先生は終戦の年には復員できず、翌1946年5月までずれ込んでいます。これは先生の「第一の終戦」で、そのときの経験が後の筑波大学移転問題のときに、しっかり生きてくる、ということになるわけです。

復員されて、一旦、中津の学校に戻られますが、戦後の教育についての抱負を語って意見の相違を見た、と自伝には書かれています。要するに、校長先生と議論になり、とてもこんなところにはおれんということでしょう、即お辞めになってしまいます。その後、どういう経緯か、この辺は私も伺ったことがないのでわかりませんが、大阪で教職を得られて、今の大阪教育大学の前身の大阪学芸大学へ行かれることになります。

1952年に、和歌森先生が津田先生を迎えに来られたということのようで、東京教育大へ移られます。和歌森先生は、公の場では「津田君」、しかしプライベートな場では「津田」と呼び捨てにされていました。そういう関係なのですね。「木曜会」以来の先輩・後輩関係。ですから、津田先生の和歌森先生に対する感情というのは、学問的あるいは学内行政的には、しばしば意見の相違を見たようですが、個人的には深い親愛の感情を持っておられました。私たち教え子にも、「和歌森さんはこういう方で」という具合に、折に触れてお話しされました。そういうときに、少なくとも

私は悪いお話しを伺ったことは一度もありません。

先生は、公の発言とプライベートなものというのでは非常に明確に分けられて、プライベートな面で親交を持ってらっしゃる方、あるいはお世話になった方に対しては大変礼を尽くされた。これは最後まできちんとされた方で、そういう点も、私どもは学ばなきゃいけないかな、と思っております。

教育大時代、1959年から64年まで、東京大学の社会科学研究所の研究員、そして講師併任になっておられます。東大の社研では、その研究グループの中心メンバーになられた。これが先生の学問には非常に大きな意味を持ったと思います。大塚久雄さんの門弟が、まさにたむろしていた当時の社研に入ったわけです。そこで、大塚史学と本格的に出会い、火花を散らしたわけです。先生の学問はそこで磨きがかかったと言うべきでしょうか。一時は大塚史学の立場の日本史研究者とすら見られた時期さえあったぐらいです。しかし、決してそうではないのです。

先生が苦笑されてお話しされたことがあります。『大塚久雄著作集』の月報に先生が寄稿された。先生はいろいろな学者をちゃんと客観的に見る。先ほど言ったように、プライベートでは大塚さんにとっても親近感を持っておられ、学問的にも高く評価されていた。私どもにも、大塚さんの本を読んだか、とよくおっしゃって、私も学生時代に『大塚久雄著作集』を乏しい小遣いをはたいて買い、一所懸命、読んだものです。しかし、先生は、大塚さんの学問をやっぱりきちんと評価をしなきゃいけない。そのポイントは、近代と現代、資本主義の成立期と帝国主義の時代の違いという問題です。近代では有効であったとしても、現代においてもはたしてそうか、という観点から、大塚史学の有効性と限界というようなことを、月報に書かれたのです。それが大塚さんにはどうもお気に召さなかったようで、以来ちょっと…、ということになったようです。「つい、ああいうことをやってしまうのだが」と反省めいたこともおっしゃるのですが、学者としてとなると、どうしてもきちんと対峙される。その点が津田先生のもう一つの面だったかな、というふうに思っています。これは私どもなかなかできないことで、つい個人

的な関係に引きずられちゃうようなところがあるのですが、その辺は非常に厳密に分けておられた点であります。

そうこうしているうちに、筑波大学移転問題が起こってまいります。先生は1953年11月に講師から助教授になられています。ですから、赴任して1年でもう助教授になられているのですが、何と助教授時代が21年間も続きます。これはちょっと異常でして、実は先生は昇任の要件に十分達して、教授会でも昇任の手続をとっていたのですが、評議会で止められていたのです。それは例の筑波移転に賛成か反対かで、反対派の教員は全部昇任を止められたのです。同じく、私どもの先生では桜井徳太郎先生。後の駒沢大学の学長、和歌森先生が亡くなられた後を受けて日本民俗学会の会長になられた方、この方もずっと、止められていました。桜井先生のように、吉川弘文館から著作集が出るような先生の昇任を止めていたわけです。学者としての問題点では全然なく、学内事情で止めていた。

1973年6月に筑波大学法案が国会で、田中内閣のときですが、強行採決されて、一応通るわけです。筑波大学の設立が決まるわけですね。それで学内融和を図らなきゃという措置で、先生たちの昇任人事の凍結が解かれまして、桜井先生と津田先生は同時に教授に昇任された。私ども学生たちが喜んでお祝いの会を催したいと申し上げたら、お二人とも苦笑いして、「ちっとも、めでたくない」っておっしゃっていました。そこで、記念講演会なら、ということでお願いしたら、お二人とも快く引き受けてくださいました。

1978年に教育大の廃学に伴って辞職をされました。これもいろいろ経緯がありまして、「廃学に伴う辞職」という一条を大学に認めさせようと、随分、大学当局とやりとりされたようです。

そして、四分の一世紀を超える東京時代を終えられて、大阪へ帰還されました。先生の言葉をそのまま申し上げますと、「わしゃ、大阪が好きやねん」ということになります。これですね。もう本当に故郷へ帰ってきたという。東京で非常に学問的な仕事もやられたし、たくさんの弟子たちを育てられたのですが、やはり故郷はいいものようです。先生は大阪へ帰られて、亡くなられた

親友の有坂隆道先生とご一緒の職場、この関西大学で本当に楽しくお仕事をさせていただいていたように、私どもは拝しておりました。

それから15年後、先生は、膵臓癌に冒され、永眠されます。大阪の高槻にお住まいになっておられたので、そこの大阪医科大学附属病院へ入院されました。先ほども高橋隆博先生のお話にございましたように、看病されていた奥様が急逝され、娘さんたちが遠方にいらっしゃる関係で、先生一人が高槻の病院というわけにもいかず、しかも病状が悪化していたものですから、そのままにされていたお宅のあった、東京の中野の病院へ移られます。しかし、なかなかじっとしている病人ではなくて、お宅の近くの商店街を歩いていて倒れ、骨折されてしまいます。「もうちょっと静かにしてください」って、私どもは申し上げたいところなのですけども…。しかしまあ、そういうところが先生らしいのです。その骨折も癒えたか癒えないかのうちに、お亡くなりになります。享年74歳でした。

さて、先生のお人柄は大体そんなようなことです。また後で、いろいろお話が出るかと思えます。

## II. 津田先生の学問的業績

津田先生の学問でございますが、大阪時代は大阪とその周辺地域の史料発掘・収集に挺身されて、いわゆる「摂津型」というものを検証する史料の探索と研究をなさいました。これは戦前に、戸谷敏之という方がそういう地域類型論を組み立てておられました。

もともと山田盛太郎という方が立てた地主制の地域類型論で、大規模地主のいる「東北日本型」と、それから中小地主が多い「西南日本型」と、そういう分類がございまして、これを歴史的に遡及させて行ったのが、戸谷さんの研究なのです。戸谷さんは、「西南日本型」を二つに、「阿波型」と「摂津型」に分けます。「阿波型」というのは、商品経済が農村に浸透するんですが、農民があまり豊かにならない。「摂津型」の方はそうではなく、農村が商品経済のなかで豊かになっていく地域です。その「摂津型」というものを検証する史料は村明細帳で、そこに記載された金肥、購入肥料の比率の分布でもって組み立てた議論です。全国的

な視野でやったものですから、非常に荒っぽい議論なのです。

先生は、これを実際の在地の史料でもって確認する、という作業をやろうと志を立てられたのです。既にそのときから、実は大塚史学との邂逅があったのです。というのは、戸谷さんは、大塚さんのお弟子さん筋に当たる方だったのです。しかし、先生は、同時に、「摂津型」の地域の中でもいろいろな問題が出てくるはずだとお考えになり、戸谷さんのように、一般繁栄論はとりませんでした。村全体が繁栄したと、そういう単純なものじゃなくて、繁栄の陰に起こってくるであろう問題にも目を向けられた。やはり光あれば陰ありで、そこに農民の貧富、階級的な分解が起こって来るだろう。その中から、地主と小作の関係とか、あるいは資本と賃労働の関係とか、そういう問題が展開してくるはずだ、と。それを何とか探したい、ということなのです。

それで、いろいろ探していく中で、百姓一揆とは違う、「国訴」という新しい農民運動の形態にめぐり会い、発見されるわけです。今日、高等学校の日本史教科書などにも「国訴」が出てくるわけですが、これは津田先生が史料の中で発見された。これをどこかの学会で「クニソ」と言った方がおられて、先生はカンカンになって怒って、「あれはコクソじゃ」と言っておられました。先生はそういうふうに読んでおられる。何か、ひらがなで書いた史料があるらしいですね。

それからまた、平野の郷学の含翠堂とも出会う。これはもともと有名だったわけですが、その研究を本格的にやるというようなことをされました。

東京へ来られてからは、最初のうちはそういう大阪時代の遺産でやっておられたんです。ですけども、「学位は？」といろんな方に聞かれたらしいですね。それで、先生は奮起されまして、新しいことをやろうということで、当時上野にありました国会図書館の分室、ここに所蔵されていた「旧幕引継文書」に取り組みされた。授業の合間やお休みに、そこへ通い詰められた。今でこそマイクロフィルムが出て、いろいろなところで見られるのですが、当時はそこに行かなければ見られない。しかも原文書をコピーする機械もまだない、マイクロ写真を撮るようなお金もない。結局、そこに

通って、片端から読んでいき、これはという部分はみんな手書きで写していく。これが勉強になったのですね。要するに、何があるかわかりませんから、全部読んでいったわけです。

そして、先生の言葉で「油」、つまり絞油業に関する史料群と出会われたのです。そして、その「油」を調べていくと、「国訴」とも繋がって来る。そういう繋がりが見えてきた。ここで、津田史学の骨格ができ上がってくるのです。だから、津田先生の学問は、大阪だけではできなかったと思うのです。

「油」を介して、「摂津型」地域で起こってくる「国訴」と幕府の市場政策との関係という問題が見えてきた。それは同時に、近世国家のあり方全体の理解の問題へ展開していく。「油」との邂逅は、地域史のレベルから今度は日本の国家史、全体史のレベルへと、先生のご研究が展開されていく大きな転機になったと思います。

東京でのお仕事のもう一つは、国立公文書館の設立に関与されましたことです。先生のお葬式の際に東宮大夫の岩倉規夫さんという方から弔電が来て、何で東宮大夫から来るのだろうか、その整理に当たられた方が不思議に思われたそうです。実は、岩倉さんは国立公文書館の初代の館長さんで、その関係なのですね。お葬式の最後にご親族を代表されてご挨拶なされたのは、甥御さんの津田孝さんでした。孝さんは、『民主文学』の編集長をやられたような方です。そういう人脈とは到底縁もゆかりもなさそうな、東宮大夫から弔電が舞い込んで来たものですから、担当の方は戸惑われたのだと思います。

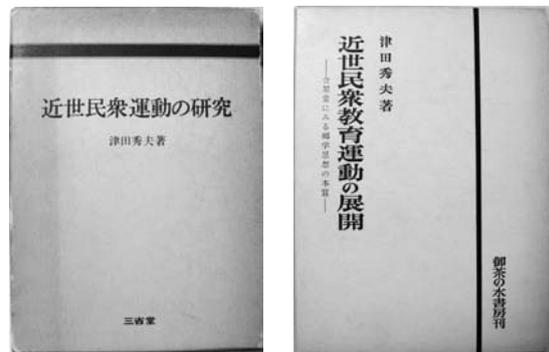
ついでに申しますと、こんなお話もあります。教科書裁判の法廷が開かれたとき、国側の証人として出廷された学者と、先生が廊下で親しそうに談笑されていたことがあり、それを見たみんなが怪訝そうな顔をしていた、と笑っておられました。先生ご夫妻は、家永三郎先生の裁判を終始ご支援されておりましたが、その学者の方は大阪時代の研究会のお仲間だったそうです。そのように、先生は非常に幅が広いおつき合いをされていました。

最後は、大阪時代ですが、学術会議で奮闘をされました。学術会議の会員に、大阪歴史学会や地

方史研究協議会などから推挙されて、就任されました。学術会議では史料の保存・利用の問題を主に担当されて、先生は非常に頑張られました。そして、「四権分立論」を説くんですね。立法・行政・司法に加え、もう一つ「記録」という国権を立てなくちゃいけない。「四権分立」にしなきゃいけない。それがだめなら、せめて会計検査院ぐらいの独立性を持った「国立文書記録院」をつくるべきだ、というようなことを提唱されました。これには、みんなが目を白黒させましたが、そんなことを一所懸命やられた。これは夢に終わっておりますけれども…。

さて、先生のご研究は、基本的には近世国家解体過程の研究が中心でありまして、先生ご自身が『封建社会解体過程研究序説』という論文集の「はしがき」で書かれておりましたが、四つの方面からおやりになっています。

一つは国訴の発見と含翠堂の追跡を軸にいたしました、近世国家に向き合う内発的、自生的な、それを変えようという運動なり主体ですね、そういうものの追求です。これは『近世民衆運動の研究』とか、あるいは『近世民衆教育運動の展開』とかという書物に、その研究がまとめられています。



それからもう一つは、亡くなられた一橋大学の佐々木潤之介さんの「豪農＝半プロ」論を意識した、幕末社会の構造的変化の追究です。江戸時代後半になると、農村の名主・庄屋クラスが貧窮な農民の年貢・諸役を代納するようなことを通じて、貧農の土地を地主支配していくとか、あるいは、彼らの副業である賃稼ぎの機織りなんかを支配していく、こういう動きがめだってくる。佐々木さんは、そういうことをやる地主などを「豪農」とし、それから、彼らに支配されるようになる貧

農を「半プロレタリア」とした。これは、レーニンがロシアの資本主義の発達史でやった議論を援用したものなのです。これだと、いずれこの「豪農」は、その大半が寄生地主になり、「半プロレタリア」は小作人や労働者になる。だから、江戸時代の後半から、もうそういうコースが決まっていた、という非常にある意味ではストレートに近代と近世が結びつくような議論になるわけです。それに対して、先生は、いや、そうじゃない、そこに実はもう一つ可能性があった、とおっしゃる。歴史のなかの可能性を探るのだ、それが「撰津型」地域に見出せるのだ、という議論をやられた。

たしかに、「撰津型」地域というのは繁栄していくのです。これは綿だとか油だとかで繁栄していくのですが、その中で「第二次名田小作」というのを、先生は検出されるわけです。これは、年貢を払っている人の土地をわざわざ借りてまで自分の耕作地を拓げている、そういう小作がある。これは、貧農がやる小作ではない。名田というのは年貢・諸役がちゃんとかかっている土地ですね。それを小作が借りている。さっき申し上げたように、もともと普通の小作、質地小作というのは、検地帳に登録してある自分の土地を、金を借りた地主に借金を返すまで預けて、それを自分が小作するのです。自分がもともと所持していた土地を自分で小作する、というものです。「第二次名田小作」というのは、そうじゃなくて、人の所持地をわざわざ他人が借りて耕作する。これは要するに、いわゆる「資本家的借地農」の日本的形態だと、そういう考え方なのです。

こういうふうに、農民のなかにはまさに農業資本家になるような芽生えのようなものも出てくる。他方で、綿だとか油だとかを加工する小さな工場みたいなものもつくられるんです。小さい、5人かそこいらの作業場、工場というようなものじゃない、作業場。だけど、これは立派な「マニファクチュア」である。そういうところへ、わざわざ女性じゃなくて男性が勤めに行って働いているケースを先生は検出されまして、これは通勤労働者の出発点じゃないか、と。これを、先生は「原生プロレタリアート」と命名された。佐々木さんのは「半プロレタリアート」、半端なプロレタリアートだが、こちらは正真正銘、本物のプロレタ

リアートだ、というわけです。負けず嫌いなものですからね。常にそういうことを先生はおっしゃるのですけれど、それを見つげられた。

問題は、これがはたしてどれぐらい一般化できるかということ、なかなか難しいのですね。「第二次名田小作」については古島敏雄さん、「マニファクチュア」については安良城盛昭さんからの批判もあるのです。そういうふうに、「それはちょっと、そこまで言うのは言い過ぎじゃないのか」というような議論も一方ではありました。これに対して先生は、「絶対にそうではない」という立場でやって行かれたわけです。この辺の研究が『幕末社会の研究』という本の中にまとめられております。

それから、油の研究は『封建経済政策の展開と市場構造』で、これは要するに幕府の市場政策の展開をずっと追いかけた研究です。



最後に政治史で、『封建社会解体過程研究序説』。これは、もともとベースになっているのは、先生の処女作である『江戸時代の三大改革』という、アテネ文庫というとても薄い文庫本です。この本は、展示にも出ていますが、弘文堂という和歌森先生なんかと大変深いかかわりがあった出版社から出したものです。文庫本ですから、ごく簡潔なものですけども、江戸時代の政治史を社会経済史



と関連づけて概説したものなんです。これをベースにしながら『封建社会解体過程研究序説』をまとめ、さらに『天保改革』という、天保改革についての、かなり詳しい歴史叙述をやっておられる。



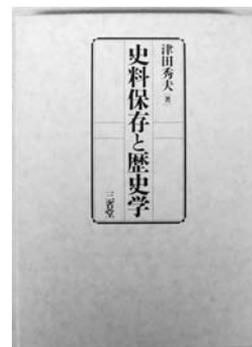
この『天保改革』は小学館から出たのですが、これは私どもが丁度学生の頃に執筆されていました。何しろ膨大な量の原稿を書かれました、何と2冊分になったんですね。出版社と掛け合われたようですが、とても2冊にはできない、という返事。『天保改革』だけ2冊というのは、「日本の歴史」というシリーズの中ではあり得ないですからね。そこで先生はどうしたかという、ねばって、1行の字数を1字だったか2字だったか増やし、さらに1行増やしたのです。それでも増える量は高が知れています。当時はパソコンなんかありませんから、全部手書きの原稿なのです。結局どうされたかと言うと、元の原稿を切り刻んで繋いでいった。あれは定期配本ですから、全部を書き直している時間的余裕がなかったんです。この作業を間近に拝見したときは、なんとも残念に思ったものです。

先生は、論文を書くとき、すごい量を書かれるのですよ。例えば、古島さん編の『日本地主制史研究』という論文集に、「第二次名田小作」についての論文を書かれています。先生のお話では、あれも実は膨大な量を書かれたそうです。結局はそれをまとめることになったわけですが、そうすると、よく話が繋がらなくなるのですね。私どもは授業でお話を聞いていますから、どういう繋がりになっているかわかるんですけど、論文だけ読んだのでは、何だかよくわからなくなっちゃうんです。そういうところがあります。

実は、先生の同級生の方が当時校長さんをやっ

てらっしゃるので、教員採用の面接に東京都立のある高校へ行ったことがあります。そのときに、その校長先生が「津田君の教え子か。じゃあ、君も原稿をたくさん書くのか？」と聞かれたのです。「えっ、何ですか？」と伺いましたら、こうなのです。先生に高校の日本史の教科書を書いてもらったら、天保改革だけで何十ページ分も書かれた。教科書で、そんな天保改革が何十ページもあるものがあるわけじゃないか、というようなことをこぼしておられました。「ああ、やはりなあ」と思いましたけれど、先生はそんなお方でありました。

こうした先生の各方面でのご研究相互の関係、展開の順序ですが、本当ならば、論理的には、1の幕末社会の構造的変化、2の維新変革の主体形成、3の市場構造の変質、4の幕政改革、となるはずだと思います。しかし、『封建社会解体過程研究序説』の「はしがき」では2、1、3、4の順番で、変革主体の追究から研究を始めた、とはっきり書かれている。その理由はやはり、復員が遅れるようなことをやりながら、戦後というものを迎えた。そして、戦後の教育のあり方をめぐって辞表を出して大阪へ戻ってきた。そういう出発点なのですね。だから、やはり近世史、幕末史をやりながら、先生の目は現代に向けられていた。戦後、再出発した日本というものが本当にこれよかったか、という問い直しを、歴史の研究を通じてやる。こういう面があったのだと思います。そういう先生の歴史学的方法的な立場については、『史料保存と歴史学』という本にまとめられていますので、もしお手にとる機会があれば、この中の第一部にまとめられていますので、是非お読みください。



### Ⅲ. 津田先生と私

最後に、私と先生の出会いをお話して締めくくらせていただきたいと思います。

私は1972年4月に教育大に入学しております。私が入学したとき、4年生というのはまったくおりませんでした。5年生、4年生ゼロ、3年生、2年生、そして私たち1年生と、こういう学生の構成でありました。これはどういうことかという、大学紛争で東京大学や京都大学と同じように、教育大も入試も試験も1年停止したのです。それで、5年生の学年が全員留年してしまいました。そういうことであります。

そういうなかで、私どもの学部、文学部では、いわゆる「筑波大学法案」が通った関係で、1973年度の入学生をもって、学生の募集は停止になりました。他の学部には、1974年度までやったところもありますが、それでおしまいです。

そういう雰囲気なものですから、法案が通るときは大学の中が騒然としておりまして、私がこの大学へ行っていたら、先生に廊下でつかまって、「君は授業に出ていて、いいのか」とおっしゃる。これには、随分驚きましたが、歴史を研究するよりも、歴史をつくる方が大事だ、というような、戦後のある時期の雰囲気のようなことを、当時は、先生もおっしゃっておられたのです。さりとて、勉強をおろそかにしていたら、それはそれでまた雷が落ちるのですが…。

私は、先生の古文書と卒論でゼミに入らせていただきました。それでしょっちゅう、先生の研究室にお邪魔しては、お茶やお菓子をご馳走になりながら、お話を伺っていました。先生の研究室には手製本の抜き刷り群というのがあります。これが木製のガラス書棚にいっぱい入っているんです。研究者ごとに抜き刷りを集めて、それをボードでもって固めて、何か変な本をつくるんですね。そして、「この研究者は随分長くやっているのに、まだ本にならん」とか、「この研究者はこれだけ本になって、ここへちゃんと見出しが書けるようになっていく」とか、「君たちも、ここに立つぐらい論文を書かなくちゃいけない」とか、そういうようなことをおっしゃるのです。当時の私どもは、卒論が書けるかどうか、あたふたして

いる状況で、とても抜き刷りが立つところではない、と思いましたが…。

そして、私は大学院へは参りませんで、そのまま高等学校の現場へ出まして、20年ほど勤めて、金沢大学へ移ることになるのです。先生は、私が勉強を続けたいという意思をご存じだったものですから、近世史研究会とあって、この会場にもおられます長谷川伸三先生はじめ、教え子の方々を集められて勉強会をやっておられたのですが、その会へ加えていただきました。最初の頃は月に1回ぐらいやっておられて、大阪に行かれてからはだんだん回数が減ってまいりました。この研究会は、オーバー・ドクターや、すでにどこかの大学などで職に就かれている先輩たち、つまり第一線の研究者たちの勉強会なのです。そこへ出させていただいて、そこで大学院へは行かなかったけど、それこそ大学院以上の勉強をさせていただけたのです。

一番やはり勉強になったのは、私どもが「廃学記念三部作」と言っているんですが、先ほど紹介しました『幕末社会の研究』と『近世民衆運動の研究』と『近世民衆教育運動の展開』、この3冊の書評でした。とくに、『幕末社会の研究』は、収録された論文を精読して詳細なレジュメをつくって書評する、ということをやらせていただいた。これは大変勉強になりました。最初は、専ら書評担当でしたが、そのうち研究発表もやらせていただけるようになり、ご還暦記念の論文集には処女作を載せていただきました。

そして、先生の教えは高槻の病院に入られてからも続いておりました。突然、夜、電話がかかってきて、「奥田君、ちょっと話があるのだけど、来れるか?」とおっしゃる。当時、私は神奈川の県立高校で教員をやっていたのですが、翌日、急いで教頭先生のところへ行きまして、年休を取らせてもらいます。丁度、教頭先生が津田先生にも教えを受けた、私どもの同窓の先輩で、事情を前から話してあるものですから、「津田先生のこっちゃ仕方ない、行っておいで」と快く出してもらった。こうして翌々日辺りに伺うのですが、そのときは病状がおもわしくなくて、お話ができなかったようなこともありました。

さりとて、「先生、そろそろおやすみにならな

いと、お疲れになりますよ」と申し上げると、「おまえはいつから俺に指図できる身分になったのだ」とか、いきなり身分制論者になられたりするような、お元気なときのような雰囲気の時もありました。そんなふうにして、いろいろお話を伺い、大変勉強になっておりました。

先生との共同作業はたった2回でした。一度目は、東京から大阪へ引っ越しされる時。今回展示されている史料の多くは、大阪へ帰られてから、集められたものが多いようですが、東京から持っていかれたものも少なくありません。それから、書籍類ですね。これは、現在、大阪市史編纂所へ収まっているものです。この引っ越しの作業をお手伝いしました。先生は、「他人労働は使用しない」と変な原則をつくっていらしたのです。それをやると資本主義になるから、ということらしいのですが、そんなことで資本主義になるとは思わないんですが、それをもう口癖のようにおっしゃっていた。教育大の研究室の膨大な史料や書籍の引っ越しを先生お一人でやられたら、それこそ病気にもなりかねず、えらいことになる、と思ったものですから、私はもう教員になっていましたが、教育大まで出かけて行って、先生に直談判しました。「先生は、他人労働を使用しないとおっしゃいますが、勝手に使用されるのは私たちの自由ですから、やらせてください」って、先手を打って申し上げたんです。そしたら「うーん」と。そして、「仕方ないな、じゃあやらせてやるか」という話でして、それでようやく手伝わせたのだいたいです。同級生や下級生に呼びかけ、院生の先輩たちも加わり、さらに江村栄一先生はじめ卒業生の方々も駆け付けてくださって、みんなで引っ越しの作業をやりました。まるまる2日かかりで、段ボール箱の山を築きました。

先生は、卒業生を全部送り出すまで教育大に残ると、最後まで頑張られました。実はその前に、ある大学からお誘いがあったんです。しかし、それはお断りになられた。その後、盟友・有坂先生を通じてだろーんと思いますが、関西大学からお誘いいただいたので、丁度卒業生全部を出し、教育大の廃学を見届けられてから移られた。それもおそらく、関西大学に待っていただいたのではなかったかと思います。そして、先生はこちらへ来

られた。ですから、先生の関西大学に対する思いは非常に深いものがある。そういうわがままを聞いてくださったことへの感謝という意味で、深いものがあられたんじゃないか、というふうに思っています。

それから、二度目の共同作業は、学術会議報告の原稿です。これはスペインで国際歴史学会があるというので、行かれるというときでした。『地方史研究』という雑誌に載せるために、行かれる直前に学術会議の報告をまとめなければならなかったのです。当時、私はその編集委員をやっていたものですから、中野のお宅にいらした先生のところへ、原稿をいただきに伺ったのです。いただいた原稿を拝見して、びっくりしました。今までの先生の整然たる原稿とは全然違うのです。本当にメモみたいな状態で、これには困りました。このとき、私は初めて先生の変化を知ったのです。そして、どこかお悪いのかな、と思ったのです。それで、私がそれをもとに、作文しました。それを、先生がスペインから帰ってこられてから、校正されて載せました。校正を戻される時に、私の作文は「全然、間違っている」とおっしゃっていましたが、元の原稿はどれが引用で、どれが先生の文章なのか、よくわからない状態だったので。この二度目の共同作業は、一度目とは違う意味で、やはり悲しい思いをいたしました。

先生は、病床から無理して東京へ出てこられたことがありました。一回は国立史料館の創立記念の会でした。このときはまだ状態はよろしくて、お嬢さんが介添えされながら、また例によって大きなカバンを提げて来られました。しかし、既に膀胱を抜くための管が繋がっている状態でありました。これには、東京へ来られて、親族の方たちと最後のお別れをする、という目的もあったようです。先生は大阪で最期を迎えられるおつもりだったようです。私は、品川にあります国立史料館から先生の中野のお宅までずっと一緒にお伴しました。途中、タクシーで親族のお宅へ立ち寄られ、「最後のお別れをした」とおっしゃっていました。そこからお宅へ向かう途中で、膀胱の管が外れるひと騒動もありましたが、とにかくお宅に無事辿り着いたときは、安堵しました。

その後、今度は、学術会議の会合へお出になる

とおっしゃるのです。これは大変でした。何とか止めようと先輩方が先生を説得なさったが、結局、振り切って出られることになったのです。仕方ない、受け入れ態勢をつくらうということになり、森先生をはじめとしてみんなで手分けして、いつでも先生をお迎えできる形をとりました。実は先生の奥様には、お宅へ電話した折に、取り次いでいただいたりはしていたのですが、長いお話しをしたのはこのときが初めてでした。奥様の、先生に対するご批判も、初めて伺いました。

この電話の最後に、「東京では何とか私たちが万全の態勢をとりますので」と申し上げましたら、「それもありたいけれども、そもそも津田がなぜ東京へ行こうとするかよく考えてみなさい。あなたたちがもっとしっかりしていたら、出なくていいのですよ」とおっしゃられた。これはショックでした。やはり、津田先生の奥様だ、一本、筋がしっかり入っている。中野で長く、家永先生の教科書裁判の支援運動を中心になってやられたこともあった方です。それからほどなく高槻の松坂屋でお倒れになり急逝されたので、このとき伺ったお話は、私にとって、先生の奥様のご遺言になりました。私たちがしっかりしなきゃ、しっかりしているんだろうか、そういう自問が時折脳裏を今でもかすめます。

そして、奥様を亡くされた先生を励まそうということで、先生の最後の論文集、『史料保存と歴史学』をまとめて出しました。このとき、先生は一時的に元気が回復されました。先ほど高橋先生からお話がありましたように、奥様のご葬儀のときは、本当にもうそのまま先生も逝かれてしまうのでは、と思うような状態だったのですが、この本を出すということになりましたら、元気を回復されたのですね。すごいのですよ。毎日のように電話がかかってきたりするのです。

本の趣旨は先生の研究論文以外のものを集めて出そうということだったのです。歴史学方法論、近代史料論、史料保存・利用問題に、史学史を加えて、本当は4部構成にする計画でした。先生には、史学史関係の論文が結構あるのです。それだけで、ほぼ1冊分になる。2分冊というのには、出版社が難色を示しました。そこで、史学史の論集は後日を期そうということになり、先生も了解

されました。しかし、これは、森先生が折に触れて、「あれ、どうするかね」と聞かれるのです。私は、今の学術出版の状況を考えて、「無理ですよ」といつもお答えしています。もちろん、森先生もその状況をよくご承知の上でおっしゃっているのですが…。それが私たちの、一つの心残りにはなっています。

ある方がお亡くなりになってしばらくして、その蔵書類が東京の神保町古書店に相当出たことがありました。先生は、神保町にはしょっちゅう行かれていたので、それをご覧になって、非常に心を痛められました。ご遺族は何をしているのかな、というようなこともおっしゃっていました。当然、ご自分の場合にも思いを致されたに違いありません。そういうご意思是、先生のご親族にも十分伝わっておられたようです。

ご遺族によって、史料は関西大学、書籍は大阪市史編纂所へ、それぞれ寄贈されました。今、この大学でも退職者の蔵書をなかなか引き受けてくれないご時世です。関西大学と大阪市史編纂所が引き受けてくださったので、先生の物的な学問的遺産が散逸することなく、こうして研究の用に供されるようになっております。これは、亡き有坂先生をはじめ皆様方のおかげと、教え子として大変感謝している次第です。

そして、よもや、はからずも、こういう会を催していただき、その場で私が先生のお人柄やご学問について、お話をさせていただけるなどとは、もう夢にも思わなかったことです。門弟の末席を汚している私のような者がここでお話しするなどということは大変恐縮なのですが、折角の機会ですので、お話しさせていただいたような次第です。

どうもご清聴ありがとうございました。

#### 奥田 晴樹（おくだ はるき）

金沢大学教授・同附属高等学校長。専門は、日本近現代史。1952年、東京都に生まれる。1976年、東京教育大学文学部史学科日本史学専攻卒業。神奈川県立清水ヶ丘高等学校および湘南高等学校教諭を経て、1996年に金沢大学助教授、1998年に同大学教授、2006年より金沢大学附属高等学校長を兼務。

主著に、『地租改正と地方制度』（山川出版社、1993年）、『日本の近代的土地所有』（弘文堂、2001年）、『立憲政体成立史の研究』（岩田書院、2004年）、『明治国家と近代的土地所有』（同成社、2007年）がある。

## 回想・津田秀夫と歴史学

岩城 卓二



### はじめに

岩城でございます。よろしく申し上げます。

津田さんのことをお話するには丸一日は必要ですが、そういうわけにもいきませんので、なるべく時間内にお話しさせていただきたいと思えます。

津田さんからは、津田秀夫の伝記が書けるんじゃないかと思うぐらい、学生時代のことや戦争時代のこと、それから東京教育大学におられたときのことなど、本当にいろんな話を聞かせていただきました。

滋賀大学の宇佐美英機さんが、私にこんなことを言われたことがあります。それは、近世史サマーセミナーが岡山で開催されたとき、お風呂場でのことなんです。津田先生が真ん中でぼつりと一人で湯船につかっておられる。ところが岩城君はいつでも湯船から出られるように隅っこの方にいる。宇佐美さんは、自分の先生がお風呂につかっているのに何をやつだと思われたそうです。そこで津田先生の横に行って話かけた。すると津田さんは待ってましたとばかりに、もうとにかく延々しゃべり続ける。それを宇佐美さんはただただ、ひたすら聞いていなければいけない。解放されたときには、もう本当に意識もうろうで、ゆでダコみたいになっていたそうです。「岩城君は正しかった」、と言われました。

とにかく自分が一方的にしゃべる。人がしゃべっている間は、次に自分がしゃべることを考え

ている。

また奥田先生からお話がありましたように、とにかくどんな相手にも負けたくない。それが誰だろうが、分野が違う人であろうが、些細なことでも負けたくない。そして、全身から研究者としての迫力がにじみ出ている。津田さんもそれを誇りにされていたんですが、でも決していばっているわけではありませんでした。

大学院生の私にでさえ「先生ではなく津田さんと呼びなさい」と言う。それは研究者としては同じ土俵に上がったんだから、先生と呼ぶ必要はないというんですね。私にとっては紛れもなく先生なんですが、今日も津田さんと呼ばせていただいているのはそういう理由からです。

津田さんとは、こういう方でした。

私が津田さんのもとの勉強した期間と申しますのは、津田さんが関西大学に来られてから5年後、82年の秋から91年の3月までです。冒頭で伝記が書けるほど話を聞かされたと申し上げたんですが、実は津田さんと時間を共有することができたのは私がちょうど20歳のころから28歳まで、わずか7年半しかないんですね。でも、私には鮮明な記憶が残っていて、今でもあの語り口が聞こえてきそうです。

### 1. 摂河泉の農村行脚

#### —摂河泉へのこだわり—

津田さんの学問というのは、奥田先生から詳細なご紹介がございましたように、村方騒動と国訴の研究、それから三大改革の研究、油の研究で、いずれも非常に実証的な成果ですが、それを支えていたのが史料収集です。

交通手段は悪い時代ですし、当然デジタルカメラもないし、マイクロフィルムも、とてもそんなものが自由に使えるような時代ではありませんので、その場で筆写しなければならぬ。佐々木潤之介さんが追悼文集にお書きになっていますように、津田秀夫の名前というのは、摂河泉の農村史料調査に行くとき必ず出くわすといっているかもしれません。

津田さんのこうした農村行脚の原型というのは、奥田先生からご紹介ありました柳田國男さんとのご関係や、一時期、宮本常一さんのフィール

ド調査をお手伝いになったこと、つまり民俗学に深くかかわられたことにあるのではないかと思っています。津田さんの史料調査の足腰というのは、民俗学で鍛えられていったんじゃないのかなというふうに理解しております。戦後歴史学者にとっての民俗学の位置は、考えてみる必要がありそうです。

津田さんは岐阜県中津農林学校の教諭を務められた後、1947年の3月、府立天王寺師範と女子師範を統合したばかりの大阪第一師範学校、現在の大阪教育大学に勤務されます。宮本常一さんというのは天王寺師範のご卒業で、田尻の尋常小学校にご勤務されたようです。偶然だとは思いますが、教師経験があって、ともに師範学校出身なんですね。お二人には何か因縁めいたものがあるのかもしれない。

それはともかく、若き近世史研究者であった津田さんは、摂河泉農村を歩き回られました。津田さんの史料行脚は摂河泉だけではなく全国に及んでいます。しかしながら、津田さんがよくおっしゃっていたのは、津田さんにとっての近世史研究のフィールドは、大阪周辺農村だけだったんですね。津田さんの研究対象地域は、畿内であって、津田さんがよく言われていたのは「おれは全国の史料を見ている。でも大阪周辺以外では論文は書かない」でした。これは口癖のようにおっしゃっていました。

津田さんに大阪周辺、特に畿内にこだわる理由というのを尋ねたことがあるんです。津田さんをご自身の研究については、いつもあまりともに語られず、宮本常一さんとの関係も、何かはぐらかされるんですね。ただ、どうして大阪周辺にこだわるんですか、という問いかけには、少しまともに答えてくれました。津田さんがおっしゃっていたのは、「おれは畿内こそが日本の近世から近代への変化を考えるための唯一のフィールドだと思っているからだ。そう確信しているからだ」と。

先ほどご紹介がありました大塚さんとの関係についても話してくださいました。奥田先生がおっしゃっていたように、「おれのことを大塚さんは一派だと思ってるんだけど違うんだ」と。でも畿内にこだわった津田さんの研究と大塚史学との関係は、よく考えてみる必要があると思っています。

また、ちゃんと覚えてないんですが、「安良城盛昭が何で天皇制や地主制にこだわると思う？」と言うんですね。「それはあいつの強いこだわりがあって…」という話をしてくださいました。

津田さんは大塚さんや安良城さんのことを話しながら研究対象に学問的なこだわりを持ち続けることの大切さを教えてくれたんだと思います。津田さんは、どこでも何でも、とにかく明らかにしていったら、何かがわかるという素朴な態度では全くありませんでした。畿内しか対象としない津田さんを先進地域主義と批判することもそれは可能なんですが、津田さんが大切にされていたのは、研究対象に対するこだわりだったと思うんですね。これを絶対に明らかにしたいんだという心構えを持てば、それに取り組むための方法・戦略も備わってくるということだったんじゃないでしょうか。

この点に関わってなんですが、1980年代、歴史学には新しい動向が生まれつつありました。その一つが『日本の社会史』全8巻と『日本経済史』全8巻で、ともに岩波書店から80年代後半に刊行されています。津田さんはこの社会史にも、それから数量経済学に基づく経済史にも、とても批判的でした。その理由について、当時、津田さんから二つ聞かされたことを覚えています。

一つは、戦後の歴史学というのは、社会経済史という分野で重要な成果を上げてきた。一体そのどこが問題なんだ、ということだったんですね。また、あたかも社会経済史を社会史と経済史に分断するかのようにするので、「一体何を乗り越えたいのかが、おれにはわからん」というお話でした。

もう一つが、これも大変学問的意味は深いと思うんですが、津田さんがおっしゃっていたのは、社会史のシリーズには近代がない。一方、経済史のシリーズは経済社会の成立を近世に求めて高度経済成長までを叙述するけれども、近世以前の時代は対象から落ちていると。このことを大変問題にされていて、さらに近世だけが社会史シリーズにも経済史シリーズにも含まれていることの意味を、近世史研究者はよく考えないといけない、と言われたんですね。

自分は近世史だから古代史、中世史に関心を持

たなくていい。近代史に見向きしなくていいというわけではない。日本史の中でなぜ自分が近世史をやるのかということをおまえなりに考えてみるということで、結局のところいつも話の終着点はここだったと思います。

## II. 東京教育大学の廃学

### —現実社会と向き合うこと—

研究者津田さんの学問にとって、大きな転機になったのは、筑波大学開学に伴う東京教育大学の廃学でしょう。

先ほど奥田先生が非常に詳細にご紹介されましたように、津田さんの研究に流れていたのは、戦前・戦後を生きたことで、それが村方騒動や国訴といった民衆運動研究だったんだと思いますね。民衆運動研究で、みずからの学問を形成・発展されていった津田さんにとって東京教育大学の廃学というのは、まさに全身全霊をかけた運動の実践だったんだらうと思っています。津田さんにとっては、あれはまさしく闘争だったんでしょう。

津田さんにとって歴史学というのは、過去を明らかにすることだけではなく、今自分が生きている社会といかに向き合うかで、これは完全に一体化していて、分離しない。だから津田さんは、東京教育大学廃学運動にまさに全身全霊をかけたんじゃないでしょうか。東京教育大学廃学を体験された方の中には、津田さんに対していろんな印象があることや批判的な意見があることも聞いておりますが、私はこう理解しています。

また勝手な理解ついでに申しますと、しかしながら津田さんが全身全霊をかけ、懸命な闘争をしたにもかかわらず、結果として筑波大学が誕生してしまった。東京教育大学は廃学になってしまった。私は、このことは津田さんにとって深く傷跡が残るような大きな体験になったんじゃないかなと思います。それは戦争体験と同じくらい。

東京教育大学廃学を体験する前の津田さんのことはよく知りませんが、こうした現実社会の中で運動した、闘争した。しかし筑波大学が誕生してしまった、という体験をされた津田さんと、私は接することになります。津田さんの人生の後半期で、結果としては津田さんの最晩年に当たる時期です。

もう当時、津田さんは60歳を超えておられ、風体は「お茶の水博士」。人の話を聞かないから、聞きたくても今度は耳が悪くなってきて聞こえない。そういう津田さんでした。

奥さんから言われたことがあります。「学生に厳しいでしょう」って。でも私が知っている津田秀夫は、学生に優しい人でしたね。「大学院生のときは論文1本か2本、ドクター以上は年間2、3本は出さなアカン」と、よく言われました。「ほんまかいな」と、ずっと思ってたんですけども、津田さんの著作目録作成のお手伝いをしたとき、津田さんはだいたいそのペースで書かれていることがわかりました。そういう厳しいことも言われたんですが、もう学生には優しくなっていましたね。もちろん、それは津田さんも還暦を過ぎ、健康問題を抱えておられたからでしょうが、津田さんが優しくなったのは、東京教育大学の廃学という体験だったんだと思っています。

東京教育大学の廃学を体験された津田さんは、ここにご出席の皆さんからのお叱りを恐れずに、大変失礼なことを申し上げますと、やや研究の空白期に入っておられた。かつてのように新しい研究に挑戦し、自らを奮立たせていくという心境ではなかったのではないのでしょうか。関西大学に来られてからの何年間はそうであった、と思っています。

ただ、研究者としての迫力というのは全身からにじみ出ている、還暦過ぎてもなお津田さんは第一線の研究者であり続けたいと、あらゆる学術雑誌の近世の論文に目を通されていました。それは見事なほど読んでおられました。学生が読んでいて自分が読んでいない論文があるなんていうことは、これはもうあってはならないという人でしたから、本当によく目を通されていました。その負けん気が、辛うじて津田さんをささえていたのかもしれない。

本当に勝手な私の理解ですけども、それでも東京教育大学の廃学問題というのは、津田さんにとって大きな体験で、依然、研究者としての迫力は維持されていたけれども、新しい研究に次ぎチャレンジし、生み出していくという津田さんをささえてきた気力は薄れていたんじゃないかなと思っています。あの津田秀夫をもってしてもそ

うなったということだと思っています。

現実社会と向き合う必要性は、よく歴史研究者に言われるんですけども、恐らく本気で向き合うと生半可なものじゃない。深い傷を負うことが多い。それでも向き合う。津田さんのことを思い出しながら、あの東京教育大学の廃学問題というのは、津田さんにとって余りにも大きな体験になったんじゃないかなと考えさせられました。

これが、東京教育大学廃学後に時間を共有した私の津田秀夫像です。

### Ⅲ. 史料保存問題への関心

史料保存運動へというところに移ります。

津田さんは、お兄さんが経営されていた古書店などを通じて、いろんな文書を収集されていました。いわゆる“お宝”という非常に珍しい史料も中に含まれております。しかしながら、津田さんにとっての本当のお宝史料って何かと聞かれると、長崎会所文書、一留帳ですね一でもないし、所在がどうなっているかよくわからないんですが、住吉神社の年中行事文書でもなく、東京教育大学廃学と筑波大学開学が日程にのぼり始めたときの、東京教育大学教授会資料だと私は答えたいと思います。

今、その教授会資料がどうなったのか私は知らないんですが、あるときまでは津田さんの研究室のロッカーの下に、非常に無造作に積まれていました。ただ、津田さんが関西大学を退職されるときにはすでになかったと記憶しています。ご自宅に持ち帰られていたのか、そんなことはないとは思ってるんですが、もしかしたら何らかの理由で、廃棄されたのかもしれませんが。

教授会議事録や事務関係資料というのは、教授会構成員には配付されるものですから、さして珍しいものではありません。もう御本人が亡くなって15年もたってるからいいと思うんですが、津田さんは、関西大学の教授会資料はわりと捨てておられたんですね。だけど東京教育大学の教授会資料は後生大事に、本当にずっと保存されていたんです。

これを見たある方が「津田さんは権威主義だ。国立大学の教授会資料だけ置いて、私立大学の残さないというのは権威主義だ。」と言われた



んですが、私はそうは思っていないくて、津田さんにとっては、東京教育大学というのは自分の研究をつくってきた大学としてひとしおの思いがあって、その廃学を阻止する運動というのは、やっぱり津田さんにとって何物にもかえがたかったからだと。教授会資料というのは、津田さんの個人の歩みを語る大切な歴史資料だったんじゃないでしょうか。

東京教育大学の廃学の阻止というのは、津田さんにとっては、大学がいかにあるべきかというのを問うための運動だったんでしょう。津田さんが、21世紀に入った今の大学が抱えている諸問題を予見していたというのは、ちょっと言い過ぎだと思いますが、少なくとも津田さんは、当時進行していた大学の大量化ということに対しては、大変な危機感を持っておられて、よくそういうお話も伺いました。

津田さんが史料保存問題に非常に熱心に関心を持たれるようになるのは、私が大学院生の頃でした。津田さんはもともと摂河泉農村を行脚されていたので、国立史料館問題をはじめ史料の保存公開には非常に関心が高く、発言もされてきました。ただ民衆運動研究をベースにつくられた津田さんの学問が、史料保存問題そのものを研究対象とするに至ったのは、東京教育大学の廃学という体験だと理解しています。

歴史学にとって、史料保存問題は大切だとよく言われますが、これは決して自分たちの研究のネタを保存するためではなくて、人びとの苦闘の歴史の歩みを残すことである。だから津田さんにとっては東京教育大学の教授会資料は大切だったんじゃないでしょうか。他にも同じものがあるから残さなくてもいい、という話ではなかった。教授会資料は津田さん個人にとってのまさしく戦い

の記録で、だから津田さんは残し続けたんだろう  
と思っております。ですから、津田さんにとって  
の史料保存問題というのは、津田さんなりの新た  
な民衆運動研究の始まり、幕あけだったんじゃな  
いでしょうか。

原史料をクリップで保存したり、ホッチキスど  
めをしてみたり、今から考えると驚くような史料  
保存というのを津田さんは実践されていましたが、  
それはそれでそういうこともあったと笑い話  
にすればいいと思うのですが、津田さんの気持ち  
を勝手に代弁すると、あのときの津田さんの最大  
の関心事は、どう整理するとか、どう保存するか  
よりも、なぜ残すのか。歴史学にとってなぜ史料  
が大切なのかという根源的な問いだったのではな  
いでしょうか。それが摂河泉史料調査と東京教育  
大学廃学という実体験から発せられているところ  
に、津田さんが『史料保存と歴史学』を刊行され  
たことの意味がある、と私は考えています。

#### おわりに —教育者として—

最後に、教育者としての津田さんにふれておき  
たいと思うんですが、津田さんは自称、あくまで  
自称ですが、「すばらしい教育者」でした。しか  
しながら、津田さんは、手とり足とり指導をして  
くれるような、今の大学でよく求められているよ  
うな先生では決してなかった。

津田さんは何も教えてくれなかった。古文書の  
授業と言っても、ただ学生に古文書を渡して「読  
んでこい」と言うだけで、読み方も何も教えてく  
れない。自分は辞書の帯に「これをご推薦します」  
と書いてるのに、「こんな字典は必要ない」と言っ  
てはばからなかった人で、史料の読み方も教えて  
くれやしない。ゼミで学生が報告しても、多くは  
居眠りして、ただ一人自分が延々しゃべっている  
んですね。

ですから、私はある時期まで、自分で勝手に勉  
強してきたと思いがっていた。まさしく思いが  
っていたんですが、いつからかは定かではない  
んですが、津田さんはしっかり教育してくれてい  
た、と思えるようになりました。

一つは、今日お話ししましたように、研究対象  
に徹底的にこだわるということです。私も摂河泉  
がフィールドですが、津田さんに言われたことが、

いつも頭の隅にあります。なぜ摂河泉をやるのか  
と。他をやったっていいじゃないか。なぜ摂河泉  
をやるのか。研究対象とにかくこだわるという  
ことです。

もう一つは、なぜ歴史学をやるのかです。津田  
さんは、「何を研究しなさい」とは言わないんで  
すね。ただ自分の考えを一方的にしゃべって、そ  
の行間を読み取れという教育者だったんですが、  
その様々な話を通じて、なぜ歴史学に取り組むの  
かという問いへの答えを自分なりに見出せという  
ことを、いつも教えてくれていたんです。あわせ  
て、その答えを見出すには現実社会から絶対逃  
避してはいけないことも教えてもらっていて、全  
くできていませんが、それらが自分にとっては今  
も大きいと思っています。

私は、しばしば津田さんのことを茶化すんです  
ね。私にとっては先生なんですけども、こんなこ  
ともあった、と笑いのネタにするんですが、それ  
は津田さんを英雄視してはいけないし、津田さん  
の研究に対しても批判的であり続けなければいけ  
ない、と思っているがゆえで、私にとっては今で  
も津田さんは最も怖い人なんですね。何が怖いか  
と言ったら、津田さんの前で研究報告する緊張感  
ですね。

今までお話ししたことは、あくまでも私の思い  
がこもった「回想・津田秀夫」です。今回、津田  
さんの主要な著作も全然読み返していませんの  
で、事実認識の誤解も多々あると思うんです。津  
田さんの実像については、一次史料に基づいて検  
証しないとわからないとは思いますが、エエカ  
ッコしいなところや、権威主義的なところも、  
もちろんありました。それらを認めたくえで、で  
もその津田さんと時間を共有できたということは  
本当に幸せだった、と私は思っています。

15年という歳月はちょっと驚きです。津田さ  
んが亡くなられて15年もたったんだと。でも  
15年を経てなおこうした展示会が開かれて、「回  
想・津田秀夫と歴史学」が開かれる津田さんとい  
うのは、幸せな人だと思っています。誰しもこ  
んな催しは開かれなわけですし、なによりも今  
回の展示は一人の歴史学者を通じて戦後歴史学が  
考えられる意義深いものだったと思います。

それは藪田さんの尽力によるところが大きいと

思っています。間違いなく私だとこんなこと面倒くさかってやらないですね。津田さんの史料はあるけど、「まあええんと違うか」って。展示するかとなったら、ちょっと茶化そうと、錆ついたクリップでとめられた史料を展示したりとかやったと思うんです。

津田さんのことを語るにふさわしい方が居られたと思いますし、何度も申しますが、これまでお話ししてきたことは私の津田秀夫像です。研究者としての迫力や重みがある教員が学生に向き合い、緊張感ある「ゆとり教育」の場であった大学。そういう大学で津田さんと時間を共有できたことを感謝しています。何か思い出話のようになりましたが、以上で終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

#### 〈付記〉

なお、このように記録化されるとは聞かされていなかったため、当日は放談の気楽さから随分余計なことを口走っている。さすがに放談にすぎたところは修正を加えたが、記録という性格上、全面的な修正はできなかった。そのため不適切な箇所が多々あることをお許しいただきたい。

#### 岩城 卓二 (いわき たくじ)

京都大学准教授。専門は、日本近世史。1963年、兵庫県に生まれる。1991年、関西大学大学院文学研究科博士課程後期課程を中退。国立歴史民俗博物館、大阪教育大学を経て、2006年より現職。

著書に『近世畿内・近国支配の構造』（柏書房、2006年）、論文に「幕末期の畿内・近国社会―摂津国一橋領における御用人足・歩兵徴発をめぐって―」（『ヒストリア』188、2004年）、「歴史教育と教員養成課程の現状―歴史教育の主役は教員である―」（『日本史研究』499、2004年）などがある。

## パネルディスカッション

### 【パネリスト】

奥田 晴樹氏（金沢大学教授）  
岩城 卓二氏（京都大学准教授）  
常松 隆嗣氏（関西大学非常勤講師）

### 【コーディネーター】

藪田 貫（関西大学教授／なにわ・大阪  
文化遺産学研究中心  
総括プロジェクトリーダー）



**藪田：** お二人の先生に、心のこもった話をさせていただきましたので、それをもとにしばらく議論をしてみたいと思います。まずは、津田先生の経歴を司会の松永君が作ってくれましたが、奥田先生が1972年に津田先生に出会われて、岩城さんが1982年ということですから、おそらく最晩年の最晩年、病院で授業をするという体験を、最後になさいました常松さんの方から、本当に短い出会いですが、お話ししていただこうと思います。

**常松：** 津田先生は92年11月15日にお亡くなりになりましたが、私が関西大学の大学院に入



りましたのが92年4月。その4月から7月までのわずか三カ月間ですけれども、津田先生に高槻の医大で授業を受けました。

授業を受けたと言いましても、奥田先生や岩城先生とは違いまして、病院に行くに「まず家に帰ろう」とおっしゃるんです。家に帰って何をされるかという、まず窓・雨戸をあけて、奥様の仏壇をあけて、必ずあいさつをされる。「今帰ってきたよ」というようなごあいさつをされてから授業をされる。授業と言っても、「おまえ何かしゃべってみ」と言われて、何をしゃべったらいいのか、こちらは準備も何もないんですね。

そのとき、私は学部時代に都市史といいますが、城下町の研究をしておりまして、大学院に入ったところからは農村史や大庄屋の研究をやりたいという話をしました。学生なりに熱く語ったつもりでしたが、ふと見てみると、先生はずっとベッドの中で寝ておられる。多分、そのころ非常に体調が悪かったと思いますが、「これは困ったな」と、先生のコメントもいただけないのかなと思ってるころに先生が起きられて、次のようにおっしゃるんです。「おまえの問題点はわかっておる。ただ今は言わん。夏休みまでにじっくり考えてこい。夏休みになったら答えを教えてやろう」と。「もうとんでもない先生やな」と思いながら、その帰りには「車で高槻の医大まで帰りましょう」と言うのと、先生は「松坂屋に寄れ。地下に行って追分だんごを買え」とおっしゃるので、私が「先生、血糖値が高いのにそれはだめですよ」と言うのですが、追分だんごを必ず買われていました。

その当時、先生と私ともう一人の院生の三人で高槻病院までお送りしていましたが、必ずだんごを3本買っていただきました。これも笑い話ですが、必ずみたらしとあんこと三色だんごなんです。その後、病院に帰るとまず血糖値を測るんです。食べてから測ると血糖値が高くなるので、看護婦さんが「津田さん、きょうは大丈夫ですよ」と言われると、「さあ、だんごを食うぞ」とおっしゃるんですね。僕たちは当然1本1本いただけと思ったら、「おまえのみたらしを1個おれにくれ。おまえにわしの三色だんごの赤いのをやろう」と。次は、「おまえのあんこのついた団子をおれにくれ」といった具合に1個ずつだんごを分ける

んです。だから、串に刺さった状態じゃなくて、お皿に乗った状態でだんごを食べていました。

他にもお見舞いでいただいた物を、先生は持って帰れとおっしゃるんです。リンゴをもらって家に持って帰ろうとすると、「ここで切れ」とおっしゃるんです。それも必ず、一人でリンゴを食べるのではなく、みんなで分けろとおっしゃっていました。何でそんなことを、と思いましたが、あるとき有坂先生にそのお話をしたことがあるんです。すると有坂先生は、「それは戦争を体験されているなかで、同じ物を一人で食べずに、みんなで分けたら倍楽しいからやろう、津田さんもそう思っているんだろう、だから、先生がそうおっしゃったら必ず先生の言うとおりにしなさい」とおっしゃっていました。

授業については、歴史学というより、ノーベル賞の福井謙一さんと同窓だったことや、宇宙の話、例えば、ホーキング博士のビッグバンの話をしてくださいました。先生は「宇宙は楕円形になってな、中心が2つあるんだ」とおっしゃるんですけども全然わからなくて、「ああ、そうですか」と拝聴しておりました。

ただ、奥田先生のお話にありました『史料保存と歴史学』の出版は、非常に楽しみにされていました。6月頃に少し元気になられると、「大学へ行きたい、あの本を使って授業をしたい」とおっしゃっていました。私は教え子ですから、本をいただけるのかなとかいう甘い考えを持っておりましたが、「本は買うもんや」言われて、津田先生手ずからいただきました。

非常に雑駁な話ですが、津田秀夫先生の思い出というのは、最晩年であるからこそ、こういう笑い話と言いますか、ただ、そのなかには岩城先生のお話にもあったように、「自分は答えを教えてやらん、自分自身で勉強してこい、おれはわかってるけど最後まで調べてこい、それで議論をしようやないか」という姿勢や、歴史学をどう学んでいくかについて、最晩年であっても、津田先生から教えていただいたと思っております。私からは以上です。

**藪田：** ありがとうございます。

幾つか話してみたいと思いますが、一つは大

学という形から教師と学生、特に東京教育大学は関係者の方に聞くと、やっぱりかなり変わっていた大学だったというところはあると思います。津田先生だけじゃなくて他の先生方も変わっていましたが、学生も多分変わっていた部分もあったと思います。教育大学の雰囲気みたいなものが先ほど岩城さんの話で、東京教育大学という文化がなくなる、もちろん歴史もなくなるわけですが、そこには戦後の日本の大学が持った教育大学の学風があるだろうと思います。そういう教師と学生のお話をもう少ししていただきたいと思います。今日、東京教育大学の卒業生である長谷川伸三先生も来られておりますので、少し補足をしていただけますでしょうか。思い出話でも結構ですので、津田秀夫を語りながら教育大学の授業や、あるいはその生涯を語っていただけたらと思います。

**長谷川：** 長谷川伸三です。現在(2007年12月)は大阪樟蔭女子大学におります。私が東京教育大学に入ったのは1959年です。入試のときから津田先生のお顔は見ており、その後、学部4年間、大学院がマスター3年、ドクター5年、さらに学振を1年間もらいまして、延々、1972年までずっと東京教育大学に通っておりました。

今から考えると、津田先生が40歳から50歳代の半ばでしょうか、要するに助教時代で、一番脂が乗っていた頃だろうと思います。前半は大変元気でしたが、後半は、やはり甘い物が好きだったのがたたったのか、糖尿病にかかりまして入院されることもありました。前半は、大学の雰囲気も明るくて、まだ筑波大学移転問題の陰もありませんでした。ただ、学生の方はちょうど60年安保のころでしたから、余り学校に出ないでデモにばかり行っていた時期もありました。大学の施設はあまり良くはありませんでしたけど、とにかく先生方はそれぞれ研究室にこもって、研究に明け暮れていて、われわれもそこで授業を受けたりしておりました。今からみると、津田先生の一番脂が乗った時期だったと思います。

津田先生の学問について、例えば『封建経済政策の展開と市場構造』は難しい本で、大学院時代にその本の書評会をやることになり、難しくてなかなか歯が立たなかったように思っています。



学部時代は、集団指導体制というか、ゼミといても複数の先生のゼミに出てもいい。だから、誰が指導教官ということはなかったように思います。それは、ある面では少し無責任なところがあったと思いますが、今から考えると結構よかったです。私が東京教育大学に入ったときは、津田先生が来られて4、5年でした。津田先生が来られてからは、学科の運営は教授でも助教授でも対等に議論をしようということで、いろいろ慣例となっていた問題も全部一から見直そう、ということのようでした。私どもが入学した頃は、集団指導体制が確立しており、それはおそらく津田先生の功績だったのではないかと思います。

あと個人的には、ドイツのシュツットガルトで行われた国際歴史学会に津田先生と同行したときの思い出がございます。おそらく佐々木潤之介さんが音頭をとったと思います。私はそれに同行することになりました。初めて海外に行くので大変緊張して、東京の箱崎町でまず空港バスに乗って成田に行くわけですが、そのとき津田先生の隣にいたんですね。その後の飛行機でも津田先生の隣だったんです。当時、ヨーロッパまで行くのはアンカレッジ経由で行くわけですから大変時間がかかるわけですが、先生はしゃべりっぱなしなんです。私は初めての海外旅行だったため少しでも、一時間でも眠りたかったのです。ですが先生はずっとおしゃべりになって、ヨーロッパに着いたとき、私はもうヘトヘトでした。到着後、これまた津田先生と相部屋だったんです。これも参りましたが、先生とそういう旅行を一緒にした思い出があります。

国際歴史学会では、津田先生は英語で報告をする課題を持っておりまして、日本の封建制について報告しなければならなかったのです。英語の草

稿はもう既にできていましたが、どうも私が読んだところ、津田理論ではなく佐々木理論で書かれていたようです。よく妥協したなと思ったんですけども、それはともかく、部屋の中で草稿を読んでいるんです。それで、そういう大事な報告を控えてるから、少し落ちついてゆっくりなされればいいと思うんですけども、前半スペインやポルトガルでの昼間のツアーの後、もう少し追加のオプションツアーがあると行ってしまおうんです。私が「先生、帰りましょう」と言ったら、「いや、わしゃ帰らん」と。せっかくこの町に来たから、山の上の中世の城跡を見に行くと言い、それから帰ってくると、先生は「疲れた、疲れた」と言うんです。疲れたと言いながらも、佐々木さんたちに誘われると、どこかに行ってしまう、後で「何しに行ったんですか」と聞くと、「テレビで闘牛を見てきた」と言っていました。スペインに来て闘牛がわからなければ、スペインに来た価値がない、と言っていました。後半、ドイツに着いてからは報告も近づいたということで、先生は個室になり、私も個室になって、ホッといたしました。

先ほど奥田さんのお話のなかで、抜刷のファイルというお話がありましたが、あれもいろいろ変遷がありまして、最初のうちは穴をあけて、ひもでとじていたと思いますが、だんだん増えてくると、のりで固めてとじるようになりました。その抜刷はアイウエオ順になっておりまして、厚いもの、薄いもの、いろいろあるわけですね。こちらが、やっとの思いで書いた論文を先生に持っていくと、「よしよし」と言って、「ハ」から長谷川の分を出してきて、「君のはまだ薄いな、もっと厚くするようにせにゃならん」と言うんですね。それは現在、幸いなことに大阪市史編纂所で引き取っていただいております。

ちょっとまとまりませんでした、そんなところです。

**藪田：** ありがとうございます。では次に、津田先生いわく「わしゃ大阪が好きやねん」ということで、少し大阪論について議論をしてみたいと思います。今日のフォーラムの主題は「なにわ・大阪の文化力」ということで、大阪という場所が社会のなか、あるいは文化のなかでもつ特徴、あ

るいは個性をもっていると同時に、それは集められた史料にも出てくると思います。常松さんの頃は、そのようなお話はありましたか。

**常松：** 岩城さんのレジュメにありました、摂河泉の農村行脚、摂河泉へのこだわり、にも関わりますが、津田先生がもし生きていらしたら、聞いてみたいことがあります。先生は摂河泉にあれだけこだわっていながら、北河内では残念ながら津田秀夫の名前を聞かないんですね。津田先生にとって北河内は魅力的ではなかったのかなと考えるわけです。

一つだけお話をしたことがあって、生まれ育ちはどこだ、というお話を先生がされたことがあり、私は枚方ですと言いました。すると、先生は古島敏雄さんの話をされました。古島批判をされるんですね、「古島は歩いて見とらん、自分は現地を足で歩いたところに違いがあるんだ」ということを聞いたことがあり、その言葉が非常に印象に残っています。

**藪田：** ご両人にもお話いただきたいと思いますが、まず奥田さんにお聞きいたします。津田先生が東京に移られて油の研究をやっておられるときに、古文書を持ってきて、大阪の話はやられていましたか。

**奥田：** はい。古文書のダンボールを持ってきて、「はい、これを読みなさい」と適当にどこか史料をとってきて、自分でそれを解説するわけです。でも、読めないんですね。仕方ないので、津田ゼミの対策ゼミというのを作りまして、古文書の勉強をしました。ですから、大阪の史料は読ん



だ記憶があります。

津田先生が、関西大学へ来られる直前に論文集にまとめられた『幕末社会の研究』の中で、「起爆剤論」を述べておられます。要するに、近世国家を解体していく起爆剤になるのが、いわゆる摂河泉、大阪周辺農村だということを言われたんですね。

今、常松さんが言われて気づいたのですが、先生は全部回り切れなかったんですね。というのは、よく考えてみると期間が非常に短いんです。1947年から52年までなんです。東京に来られてからは、当時の交通事情や経済的な事情から言っても、頻繁に大阪へは史料調査に行けないですから、おそらくその期間に、大変足しげく動かれと思います。

もう一つは、先生は、実は農村だけではなく、都市の史料も見ておられる。船場などに行かれていたんです。「船場では店方と奥方では言葉が違う。それで、奥方に入らないと史料を見せてもらえないから、わしは香道をやった」とおっしゃっていました。お茶、お花、香道、一通りみんなやっただと。お手前を受けてからお話が進んで、はじめて「史料を見せましょうか」ということになる。これは、歴史家として史料調査を行う基礎的素養だと言っておられました。ただ、先生には残念ながら船場の論文はないんです。おそらくそういう研究もやりたいとは思ってらっしゃったのかもしれないけれど、そこまでは手が回らなかった、あるいはいい史料にめぐり会えなかったのかも知れません。ですから、北河内は行っておられないかも知れない、と思いました。

**藪田：** 岩城さん、津田先生が関西に戻られてからはどうでしたか。大阪周辺歩きに連れていかれましたか。

**岩城：** 僕は1回ですね。もう先生はお年でしたし、農村調査は関西大学に移られてからは、新たにされることはなかったと思います。

先ほど奥田先生がおっしゃっていましたが、先生が大阪にいた期間は本当に短期間でしたし、農村調査が和泉国など、割と南部が中心になっているのは、宮本常一さんのフィールド調査自体が



南部から始まっており、たしか津田さんの担当は和泉国だったはずです。そのため、そちらから始まっているのだと思います。それと当時おられたのが平野ですね。当時の交通の便などを考えると、南部に行ったのではないかと思います。

ですから、私は本当に関西大学に移られてからの津田さんしか知らないのです、よくそういう農村調査をしていた話を聞きますが、実際に一緒に行ったということはないですね。

**藪田：** さきほど奥田さんの話に出た香道の話は驚きましたね。

92年に津田先生が亡くなられた年に古文書室ができますが、そのとき私は古文書室の一角に、畳を敷いてもらいました。それは、一つは京大の陳列館が敷いていたということもありますし、私も古文書調査に行くと、応接室ではなく畳の居間に通されるわけです。そこで畳の上でご主人から史料を見せてもらったり、また話を聞かせてもらうわけで、ある意味面接をされるわけです。やっぱり畳にちゃんと座って対応できなければ古文書は見せてもらえない、というふうに私も思ったので、敷いてもらったところがあります。

ではもう少し、その史料について議論していきたいと思います。歴史学は史料が大事だ、と一般的によく言われますが、津田先生の史料へのこだわりというのは確かに相当なものがあったと思います。岩城さんの時は、研究室に古文書を置いて、それを次々と読んでいくという授業のスタイルでしたか。

**岩城：** 研究室には無造作に置いてあって、「こんな史料がある」といって見せていただきました

たけれど、それを授業で使われるということにはなかったですね。特に一緒に史料を読むというものもなかったし、この古文書を読む、というものもなかったですね。でも史料に対するこだわりは、本当にすごかった。

**藪田：** 奥田さんに振る前に、藤原有和さんがおられますので、一言お願いします。藤原さんは学部は違いましたけれど、津田先生の警咳に接せられたと思いますが、いかがですか。

**藤原：** 私は83年に、図書館古文書室に勤務することになりました。津田先生は、古文書室で授業をされましたので、私も大いに勉強になりました。たしか津田先生が、最初に大学院の入学試験で古文書の試験を始められたと思います。

ただ残念ながら、新しい図書館ができ、古文書室が解体してしまうという問題が起きまして、津田先生はそれを大変問題になさっておられました。図書館の地下2階に古文書の保管室がございまして、その横の部屋でしばらく授業をなさっていました。古文書室は文学部に新たに復活しましたが、そういう点では一時、先生は授業がしにくい状態にありました。

私も本当にいろいろ津田先生に教えていただきました。今お弟子さんのお話を聞いて、津田先生と同じ世代のお世話になった先生方のことも、あわせて考えておまして、その世代の先生方はすごかった、気骨のある先生方が多かったと思います。こういうことを考える機会を与えていただいて、どうもありがとうございます。

**藪田：** 図書館で古文書が授業で使えないから、ストライキをしようとしたら、有坂先生と二人で、「わしゃ組合の委員長やからストライキできるんや」とか言ったとか、有坂先生からお聞きしたことがあります。関大初のストライキが成立するとかいう話があったらしいですけど、どこまで本当かどうか。

奥田先生には、東京教育大時代の史料の扱い方や、史料と教育ということで少しお話をいただけますか。



**奥田：** 先生は関東の農村でも調査をやっておられました、基本的には長谷川先生をはじめ、お弟子さんたちにお仕事をさせるといふか、していただくというパターンだったと思います。私たちの頃は、もう農村調査はやられていませんでした。農村調査実習もなかったです。ですから、「おまえたちを農村に連れていってやることができなくなった」ということはおっしゃっていました。そういうチャンスがなくなってきた、減ってきたのでしょうか。

一つは、そういう調査が自治体史の編さん事業と関わって行われるようになってきました。先生は「大阪市史」には関わっておられましたが、関東農村では、どこかの市史の編さん委員というようなお仕事は、引き受けておられなかった。これは先生の地方史についての、自治体史編さん事業に対する独特のご意見があったためようです。そういうことで、実際に私は農村調査には行っておりません。

先ほど少しお話に出ました史料に対するこだわりというのは、むしろ研究対象としての史料というより、史料保存そのものについて、これは先ほど岩城先生がおっしゃったことで、なるほどな、と思ったんですけども、やはり関西に来られてからだと思います。

**藪田：** ありがとうございます。最後に、津田秀夫先生を語るときには、やはり戦後歴史学という問題と関わります。我われも歴史学を今やっておりますけど、先生方と違うのは世代です。戦線の中で、周りではバタバタと倒れていく中をくぐり抜けて、生き残った者として、なぜ日本史をやるのか、なぜ大阪で史料調査をしていくのか、ということをおそらく考えざるを得なかったんだろ

うと思うのです。そういう意味では、そこに大阪があるからだとか、大阪で生まれたからではなくて、おそらく死線を越えたものがあるだろうと思います。そこが、我々の歴史学がどうしても超えられない、戦後歴史学初代の人たちの強さと言いましようか、高さだと私は思います。そういう点はおそらく世代が違って常にも考える、あるいは感じる場所があったらと思うので、最後に岩城さんから順番にお願いいたします。

**岩城：** 今日のお話で申し上げましたように、そのことを津田さんは懸命になって私たちに教えてくれたのだと思います。津田さんは自分が常に第一線の研究者であって、自分が考えてきたこと、考えていることを学生にぶつけていくことが、最大の教育であると考えておられたのだと思うんですね。だから、何か古文書を丁寧に教えてあげるとか、論文と一緒に読むとかというのは多分、津田さんにとってはさして重要な問題ではなくて、いかに自分が第一線で活躍し続けるか、ということが津田さんの教育であって、そのなかの最大の課題が、「歴史学をおまえはなぜやるのか」ということだと思うんですね。

これは、高度経済成長を見ながら育った私たちの世代にとって、難問中の難問で、容易に答えは見つからない。私のなかでは、その戦後歴史学のなかで、「なぜおまえは歴史学をやるのか」という問いについては、まだ何か答えを出せるものではありません。

ただ、私は少し津田さんと関心が似ているので、最近考えているのは、津田さんの原生プロレタリアート論もそうですけど、確かにある局面の話かもしれませんが、しかしこれは明確には佐々木さんが出した豪農半プロ論を超える話でもあり、全く違う近世社会の解体論であります。畿内から発信した近世社会解体論というのは、やはりしっかりと見直す、位置づけるべきであり、それは自分の課題だと思っています。

**藪田：** 次に、奥田先生お願いします。

**奥田：** 戦後歴史学の問題というのは、研究姿勢の問題だと先ほど申し上げましたが、やはり二つ

考え方があったような気がします。一つは、どこの地域でも同じようなことが見出せるという、そういう発想ですね。類型論的な発想と言いますか、そういう発想は、津田先生はとられていませんでした。地域間には構造があり、それが日本の全体を組み上げている。それぞれの地域が構造のなかで、それぞれの役割を持っている。いわゆる、フラットな関係ではない構造が、地域社会の日本全体的にはあり、その中で大阪というのは、やはり政治的な頭部ではないけれど、経済的臓腑部であって、大阪はやはり非常に重要な意味を持っていたことを言っておられました。佐々木さんの議論には、基本的にそれがありません。

考えてみますと、一人一人個性ある人間が歴史をつくっているように、地域もやはり個性を持っていると思います。そのなかで、大阪の持っている意味は非常に大きい。近世社会での役割も大きいし、日本の資本主義、近代化のなかでも大きい。その点は、先生はいろいろと我われに宿題を残してくれていると思います。

**藪田：** 最後に常松さん、お願いします。

**常松：** 岩城さんよりまだ若い世代で、なぜ歴史学を始めたか、ということをお問われたときに、それは司馬遼太郎であったり、身近に何らかのきっかけがあったからですが、ただ、大学・大学院に進んで、教員として学生たちに教えていくなかで、それは考えていかななくてはいけない問題だと思っています。

最初に少し笑い話的に、津田先生の戦争体験がきっと物事を動かす原動力なんだという話をしま



したけれども、あれがまさに津田秀夫が体現したかった歴史学というか、おれが体験したことを追体験ではないけども、こういう具合にして生きていくんだよ、ということをお教えてもらったのかなという気はしております。

私自身も畿内近国のことをやっていますが、私は支配の面ではなく、下から積み上げていくような地主制をやっています。そのなかで、津田先生や中村哲さんなど、あの時代の方たちの研究を再度検討する時期に来ていると思います。

先ほども少し言いましたように、北河内の研究が漏れているという話がありますが、もう一度、畿内・大阪の位置づけを考えてみたいと思います。一つは、渡辺尚志さんたちが研究した岡田家文書の研究がまもなく出ますが、地主制研究は古くて新しい研究だと思います。津田先生ができなかったこと、もしかしたらやり残されたこと、忘れていたことを再構築していく必要があると思います。もう一つの大阪というか、畿内近国の位置について考えてみようと思っております。

**藪田：** はい、ありがとうございました。

一つだけ私からも思い出話をさせていただきます。大学に教授は大勢おりますし、歴史家も大勢おります。亡くなられた先生を常にこうして回想することは、必要もないし、ほとんど意味のないことだと思いますが、やはり、時にしなければならぬ人がいると私は思います。学会がやるのは当然ですけど、関西大学でなぜやるのか、それは私の意地みたいなところがございます。私は津田先生と入れかわりのような形で関大に来て、そこには津田先生が残された古文書があり、—それは有坂先生を通じてやってきました—、私が関大にいる間にしなければならぬ仕事として、いわば送られてきたものだというふうには自覚したところがございます。もちろん研究上の関心もありますけど、おそらくそれは津田・有坂両先生が残された、私への一つのメッセージだということで受け継いでおります。

津田先生にはお嬢さん三人がおられますが、先日、そのうち二人が来られました。常々津田先生の古文書目録をお送りすると喜んで励ましのお手

紙をいただきますが、私がすごいなと思ったのは、そのお嬢さん三人すべて、結婚相手が文系ではありません。理系なんです。父親のような文系の研究者と結婚すると、いかに子供が悲惨な目に遭うかということですね。ということは、給料のほとんどが古文書に消えていく。新しいスカートもセーターも買ってもらえない。どこまで本当かどうかわかりませんが、そこまでできる学者魂というのは、一体何だろうかということですね。

今日、会場に橋本猛さんという方がおられて、津田文書を全点ご覧になった方です。1点1点、橋本さんに史料整理をしていただいています。家族の悲鳴が聞こえてくるようなこの古文書を関西大学が、たまたま私がいるときに受け継いだということです。これは、やはり是非思い出さなければならぬ。しかもおもしろいことに、自分が研究していない史料もたくさん持っておられる。まさに保存しておられたわけです。

自分が研究するために史料を集めるのは私もやります。しかし、将来やらないだろうと思う史料までも集めるということは、しかも娘のスカートも買わないで集めるということは、相当の思いがない限り、私はできないだろうと思います。こういう人が、大阪が生み出した歴史学者としておられる、その後を私はいわば受け継いでいるという喜びと責任感があったんだと思うのです。

今回、松永君もこの展示・企画をやりながら、津田秀夫という人に改めていろいろと感じ、思いを持ったろうと思いますので、松永君の話で終わりたいと思います。展示をやってみた感想を、どうぞ。

**松永：** 僭越ながら、今回展示を担当させていただきました関係で、一言だけ申し添えさせていただきます。今回の展示にあたりまして、津田先生の古文書の中で、どの文書に注目すべきかを考えましたところ、先生の平野含翠堂の研究に焦点を当てて展示をしようと思いました。加えて、その他の古文書を紹介することにしました。

展示の最初の部分をどのように展示しようかと考えましたけれど、はじめは、先生のご紹介をしようと思い、今回の展示では津田先生の日記や研究用のノートなど、その他著作物等を展示させて

いただきました。私にとって津田先生は全くお会いしたこともございませんし、どのようなお方は、漏れ聞くと、耳にするところだけですのでわかりませんが、津田先生は情熱的で、豪快で、型破りな先生ということを知っていました。

今回、本当にありがたかったのは、先ほど藪田先生のお話にもありましたように、津田先生のご遺族の方が来てくださり、展示を見ていただいた、大変喜んでいただいたのが、展示を担当させていただきました。つたない展示ですが、そちらもご覧いただきましたら、幸いに存じますので、どうぞよろしく願いいたします。

**藪田：** 最後に展示責任者の松永くんの話をしていただきました。これで終わりたいと思います。どうも遅くまでありがとうございました。(拍手)

**常松 隆嗣 (つねまつ たかし)**

関西大学・大阪商業大学非常勤講師。専門は、日本近世史。1970年、大阪府に生まれる。2004年、関西大学大学院文学研究科博士課程後期課程修了。学位論文「近世の豪農と地域社会」により博士(文学)。

論文に「近世後期における豪農と地域社会」(『ヒストリア』167号、1999年)、「篠山藩における国益策の展開」(『ヒストリア』185号、2003年)、「幕末維新期における豪農の活動と情報」(平川新・谷山正道編『近世地域史フォーラム3 地域社会とリーダーたち』、吉川弘文館、2006年)、「近世後期における河内の諸相」(渡辺尚志編『畿内の豪農経営と地域社会』、思文閣出版、2008年)などがある。

**藪田 貴 (やぶた ゆたか)**

関西大学教授。専門は、日本近世史。1948年、大阪府に生まれる。京都橘女子大学を経て、1990年に関西大学教授として着任。当センターでは、総括プロジェクトリーダーを務める。

主書に『国訴と百姓一揆の研究』(校倉書房、1992年)、『女性史としての近世』(校倉書房、1996年)、『日本近世史の可能性』(校倉書房、2005年)、『近世大坂地域の史的的研究』(清文堂出版、2005年)がある。

## 津田秀夫先生の経歴

### ○出生～学生時代

1918年6月15日	0歳	津田馬喜・増亀の三男として、大阪府西成郡今宮町大字今宮にて誕生
1931年4月1日	12歳	大阪府立今宮中学校入学
1936年3月31日	17歳	同校卒業
1937年4月1日	18歳	東京高等師範学校文科第4部に入学
1940年3月31日	21歳	同校第3学年修了
1940年4月1日	21歳	東京文理科大学史学科国史学専攻に入学
1942年9月21日	24歳	同大学卒業

### ○戦争入営～戦後

1942年9月30日	24歳	任地方教官 岐阜県中津農林学校教諭
1942年10月1日	24歳	現役入営のために休職
1944年7月1日	26歳	退営 即日召集
1946年5月7日	27歳	召集解除 復員
1946年11月30日	28歳	岐阜県中津農林学校教諭を辞職
1947年3月31日	28歳	任文部教官 大阪第一師範学校勤務
1951年3月31日	32歳	大阪学芸大学講師に配置換



### ○東京教育大学時代

1952年9月16日	34歳	東京教育大学講師に配置換
1953年11月1日	35歳	東京教育大学助教授に昇格
1956年4月1日	37歳	併せて大学院文学研究科授業担当を命ぜられる
1959年4月1日	40歳	併任 東京大学研究員（社会科学研究科）（1961年3月31日まで）
1961年4月1日	42歳	併任 東京大学講師（社会科学研究所）（1964年3月31日まで）
1961年8月1日	43歳	文部省史料館専門委員（1965年3月31日まで）
1962年3月31日	43歳	文学博士（旧制）
1963年4月1日	44歳	兼任 中央大学経済学部講師（1979年3月31日まで）
1964年9月	46歳	併任 東北大学文学部講師 集中講義
1966年4月1日	47歳	併任 東京大学経済学部講師（同年10月31日まで）
1969年4月1日	50歳	兼任 中央大学大学院経済学研究科講師（1971年3月31日まで）
1971年2月1日	52歳	学術審議会専門委員（1972年12月31日まで）
1974年5月1日	55歳	東京教育大学教授（文学部）に昇格
1974年12月	56歳	併任 琉球大学講師 集中講義
1975年6月1日	56歳	国立歴史民俗博物館設立準備会専門委員（1981年3月31日）
1978年3月31日	59歳	東京教育大学廃学に伴い辞職

### ○関西大学時代

1978年4月1日	59歳	関西大学（文学部）教授
1978年4月1日		兼任 駒沢大学大学院文学研究科講師（1979年3月31日まで）
1978年4月1日		兼任 法政大学文学部ならびに大学院文学研究科講師 （1979年3月31日まで）
1979年4月1日	60歳	兼任 奈良女子大学講師（1980年3月31日まで）
1981年4月1日	62歳	兼任 大阪大学文学部講師（1982年3月31日まで）
1983年4月1日	64歳	兼任 立命館大学大学院文学研究科講師（1984年3月31日まで）

1987年4月1日	68歳	兼任 関西学院大学大学院文学研究科講師（1989年3月31日まで）
1988年7月22日	70歳	日本学術会議会員（第14期、1991年7月21日まで）
1989年3月31日	70歳	関西大学（文学部）教授定年退職
1989年4月1日	70歳	関西大学大学院文学研究科講師（1992年9月20日まで）
1992年11月15日	74歳	東京・中野総合病院にて膵臓癌のため逝去 享年74歳
1993年8月		津田秀夫文庫が大阪市史編纂所に寄贈される
1993年11月12日		一周忌にあたり「津田秀夫先生を偲ぶ会」が開催（於東京青山会館）。
1996年1月		津田秀夫文庫古文書が関西大学文学部古文書室に寄贈される
2003年3月		津田秀夫文庫古文書目録（1）（『関西大学博物館紀要』）がだされる （2008年までに目録（7）の整理が進む）
2007年11月24日 ～12月1日		第4回文化遺産学フォーラム・関連展示（於関西大学博物館） 企画展「なにわ・大阪の文化力～大阪文化遺産学の源流と系譜を辿る～」 が開催される。

## 津田秀夫先生の業績

### 著書

- ・『江戸時代の三大改革』（弘文堂、1956年）
- ・『封建経済政策の展開と市場構造』（御茶の水書房、1961年）
- ・『日本経済史論』（共著、御茶の水書房、1966年）
- ・『封建社会解体過程研究序説』（塙書房、1970年）
- ・『日本の歴史2 天保改革』（小学館、1975年）
- ・『新版 封建経済政策の展開と市場構造』（御茶の水書房、1977年）
- ・『幕末社会の研究』（柏書房、1977年）
- ・『近世民衆教育運動の展開』（御茶の水書房、1978年）
- ・『わたしと歴史学』（私家版、1979年）
- ・『近世民衆運動の研究』（三省堂、1979年）
- ・『史料保存と歴史学』（三省堂、1992年）



### 編著

- ・『明治国家成立の経済基盤』（御茶の水書房、1966年）
- ・『解体期の農村社会と支配』（校倉書房、1978年）
- ・『近世国家の解体と近代』（塙書房、1979年）
- ・『近世国家の展開』（塙書房、1980年）
- ・『近世国家の成立過程』（塙書房、1982年）
- ・『近世国家と明治維新』（三省堂、1989年）
- ・『新修大阪市史 第四巻』（1990年）
- ・『図説大阪府の歴史』（責任編者、河出書房新社、1990年）

### 謹呈論文集

- ・津田秀夫先生古稀記念会編『封建社会と近代』（同朋舎出版、1989年）

津田先生を偲ぶ会編『津田秀夫先生を偲ぶ』（1993年）をもとに作成。

## **協力者 (50 音順・敬称略)**

岩城卓二、上田長生、奥田晴樹、曾我友良、常松隆嗣、橋本猛、長谷川伸三、藤尾隆志、藤原有和、松本望、森安彦、吉川潤

## **協力機関 (50 音順・敬称略)**

大阪市史編纂所、関西大学総合図書館、関西大学文学部古文書室

## 編集後記

「関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター Occasional Paper」No. 7をお届けいたします。No. 7は、平成19年11月24日から12月1日の期間、関西大学博物館において開催しました、第4回文化遺産学フォーラム関連展示「企画展 なにわ・大阪の文化力～大阪文化遺産学の源流と系譜を辿る～」と、同年11月29日に行いましたパネルディスカッション「回想・津田秀夫と歴史学」の記録をまとめたものです。

企画展では、「本山コレクション金石文拓本」・「津田秀夫文庫古文書」・「牧村史陽氏旧蔵写真」の3つのコレクションを展示いたしました。1週間という短い期間でしたが、300名近い方がたが来館し、展示をご覧いただきました。なお、口絵には雑誌『上方文化』の表紙写真を掲載しております。それは、今回の展示が、『上方文化』創刊号(大阪文化研究所、昭和36年)「創刊のことば」に謳われた、有坂隆道先生による精神の継承を出発点としているためです。

パネルディスカッションでは、元関西大学教授・津田秀夫先生のお人柄や学問研究を回想し、先生を偲ぶ会を催しました。津田先生の東京教育大学時代の教え子にあたる奥田晴樹氏からは、先生のお人柄や学問研究について、関西大学時代の教え子の岩城卓二氏からは、先生の摂河泉へのこだわりや史料保存問題について、先生の最晩年を知る常松隆嗣氏からは、病院で講義を受けたことなど、津田先生の学問・教育への情熱について、それぞれ語っていただきました。今後も津田先生の学問・研究を受け継いでいくとともに、なにわ・大阪文化遺産学の調査・研究に、より一層励んでいく思いを新たにしました。

企画展および本書の刊行にあたり、パネルディスカッションでご講演くださいました奥田晴樹氏・岩城卓二氏・常松隆嗣氏をはじめ、多くの方がたのご協力をいただきました。皆様に心より感謝申し上げます。

(編集 松永 友和)

---

---

Kansai University Research Center for

**Naniwa-Osaka Cultural Heritage Studies Occasional Paper No. 7**

第4回文化遺産学フォーラム関連展示

**企画展 なにわ・大阪の文化力～大阪文化遺産学の源流と系譜を辿る～**

発行日 2008年11月10日

編集・発行 関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3-3-35 関西大学博物館内

TEL 06(6368)0095 FAX 06(6368)0092

<http://www.kansai-u.ac.jp/museum/naniwa/home.htm>

E-mail [naniwa@jm.kansai-u.ac.jp](mailto:naniwa@jm.kansai-u.ac.jp)

印刷所 (株) NPC コーポレーション

---

---